

# 環状集落の成立過程

## —縄文時代前期における集団墓造営と拠点形成の意味—

谷口 康浩

### I. 論 点

- II. 早期末葉～前期前葉における初期環状集落の様相
- III. 前期中葉における墓群の造営

—統合的な集団墓と個別的な世帯墓をめぐって—

### IV. 拠点形成の意味

- V. 出自集団論と史観

## I. 論 点

### 1. 前期に始まる拠点形成の動きは何を意味するか

本論では、縄文時代早期末・前期初頭から前期中葉にかけて進展した環状集落の成立過程を論じる。中心に設定しておきたい論点は、集団墓の造営を中核とした拠点形成が縄文社会史においていかなる意味を有していたか、という点である。

環状集落は、全体的な遺跡の総数からみれば、ごく一部の限られた存在である。環状集落には、その他の集落とは異なる性格や機能が備わっていたことを窺わせる特徴が少なくない。特に中央に広場があり、内部に集団墓が造営される点がそれを端的に物語る。また、累積する多数の住居跡や連綿とした廃棄帯の形成などからも、そこが拠点として長期間維持されていたことが窺える。このような「拠点論」に対しては、一時点の規模が見かけほど大規模でないとの批判も向けられてきたが、環状集落の存在意義を考える上で、広場や集団墓に象徴される拠点的性格をやはり無視するわけにはいかない。個々の解析をいかに精緻に進めようとも、遺跡群全体に占める意味や機能に目を向けないかぎり、環状集落の存在意義は結局理解できないであろう。

ところで、遺跡群の中にこうした拠点的な環状集落が発生してくるのは、前期初頭から前期中葉のことである。前期に至ると、なぜこのような拠点が出現するのであろうか。どこにその必然的な理由があったのか。

最も発達した中期の様相と比較してみると、前期の環状集落はその数が少なく、大規模な拠点形成はまだ限定的である。また、中期環状集落に顕著に見

られる分節構造と重帯構造も未発達である。つまり、環状集落は発生当初から一定の完成された姿を示しているわけではなく、生成過程と見るべき形態変化を示している。環状集落の意味を縄文時代の歴史の中で評価しようとするならば、中期・後期の典型的な様相だけでなく、前期に進行したこのような成立過程にこそ注目すべきである。

### 2. 研究史と論点

環状集落の成立過程について、示唆に富む論考が既にくつかある。特に和島誠一・岡本勇 (1958)、坂本彰 (1982)、鈴木保彦 (1988) の次の所論は本論とも深く関連する。

和島は、縄文時代に環状集落が発達することの意味を問い、一つの明確な解釈を呈示した最初の人である。和島が最も重視したのは広場の意義であり、広場を中心とする集落の構成に集落全体が強固な統一体として組織されている姿を読み取っていた (和島 1948)。その後『横浜市史』の中で、環状集落の成立過程に関して注目すべき見解が示される (和島・岡本 1958)。和島と岡本は、縄文社会が道具の改良と共同体の規模拡大によって労働の質と量を高め、生産力を増大させていった過程を重視しており、唯物論的な歴史過程の中に環状集落の成立を位置づけた。そして、こうした上昇的發展が海進期の豊富な資源を条件として進行したことを、鶴見川入江に展開した貝塚群を挙げて詳しく論じ、南堀貝塚のような環状集落が成立する背景として、海進期の環境変化とそれに適応しようとした社会組織の変化を指摘した。

坂本 (1982) は遺跡群全体の動向の中に環状集落

を位置づけ、その盛衰が人口の集中化と分散化に関係していることを論じた。鶴見川入江の出現など環境的な好条件がある時期には人口が集中し、大規模集落の形成につながると解釈する。人口の動向を海進・海退だけで一元的に説明するのはいささか強引であり、さらに多面的な補足が求められるが、環状集落の発達と解消が前期・中期・後期に似たプロセスで進行した点を環境変化と人口密度の推移によって理解しようとした視点は評価できる。

一方、鈴木（1988）は墓域成立の意義を重視する見地から環状集落の成立を論じ、和島らとはまた異なる視角から一つの重要な論点を提起した。鈴木は前期前葉から中葉に訪れる環状集落の最初の発達期が、関東・中部地方において住居址数・集落数が急激に増大する「隆盛期」（鈴木1986）に該当していることを、広域かつ綿密な集計作業に基づいて明らかにした。環状集落の盛衰が人口密度に関係していることがより明確な形で示唆された。また、集落内に墓域が成立する事実を具体的に示し、埋葬や祭祀に関係する拠点形成の意味に目を向けている。環状集落と墓域の密接不離な関係に注目し、前期の集団墓を詳しく検討した鈴木の所論は、和島・岡本らの論点に新たな視角を加え、環状集落成立に関する議論を、より深い本質へと導くものであった。

環状集落の初現は早期末葉に遡る可能性が高いが（小林1986）、前期前葉から前期中葉に著しく増加する事実は以上の諸研究が論じたとおりである。そして、その背景には海進に象徴される生活環境の好転があり、人口密度の高まりを契機として社会組織に何らかの変化が生じたという側面が伴った。つまり、環状集落の成立過程の本質が社会構造上の問題であることを、これらの諸研究は早くから見定めてきたのである。

前期の環状集落と集団墓については、ほかにも多くの研究が積み重ねられてきた。前期の土壌墓群を分析した笹森健一（1987）、大工原豊（1998）、西山太郎（2001）、堀越正行（2001）らの研究、あるいは佐々木藤雄の食料貯蔵論（佐々木1976・78・79・84・93）の中にも、本論に関係する数々の指摘が含まれている。ここでの作業は、これまでの研究史が培ってきた多様な論点を、環状集落の成立過程の問題の中に集約し評価することでもある。研究史を回顧して思うには、基礎的な各論はたしかに進んだけれども、集団墓造営や拠点形成の意味を正面から問

う試みはまだ少ない。含蓄に富んだ多くの重要な指摘をさらに発展させるためには、それらを縄文社会の歴史に編み上げる論理が必要である。

## II. 早期末葉～前期前葉における初期環状集落の様相

### 1. 環状集落の先駆形態—条痕文期前半の兆候—

早期後葉（条痕文系土器前半）から末葉（同後半）になると、炉穴群や竪穴住居を環状または弧状に配置した集落構成が顕在化してくる。遺跡の形成過程や一時期の住居数などは必ずしも明確でないが、集落空間の規模が大きくなると同時に、中央広場を明確に意識した事例が出現する。

千葉県東金市大網山田台No.4(B)遺跡では、約50基の炉穴を長径約100m、短径約40mの馬蹄形に配置した大規模な集落跡が発見されている（青木1994）。竪穴住居跡は南東部の外側に位置する長楕円形の大型住居1棟のみであるが、炉穴群はほぼ線対称形に整然と配置されており、中央部に広場的な空間が確保されている。炉穴の多くは複数の火床を伴って重複しており、ある程度長期にわたり使用と構築が繰り返されたことが窺えるが、それらは無秩序に重複しているのではなく、広場を意識した空間規制によって全体的に統一されているように見える。

炉穴群を環状に配置した同様の事例が、千葉県沼南町石揚遺跡にも見られる（安井1994）。大網山田台No.4(B)遺跡ほど明瞭ではないが、39基の炉穴に囲まれた中央部には、やはり直径40mほどの広場的空間が意識されているようである。炉穴群の南東部には大型住居を含む竪穴住居4棟が位置しており、環状の炉穴群と大型竪穴住居との組み合わせにも大網山田台No.4(B)遺跡との共通性が認められる。

神奈川県横浜市大熊仲町遺跡における炉穴群の分布状態も、中央の広場的空間を強く意識したものである（坂上2000）。炉穴は全部が同時期ではないが125基が残り、それらは中央の広場空間を囲んで、大きく2列に分かれて列状に分布している。炉穴群の各列にはそれぞれ2～3棟の竪穴住居が伴っている。集落空間の規模は長径約200m、短径約80mにも及ぶ。馬蹄形集落の祖形ともみなし得る空間構成であり、広場を囲む2列の構成は「二大群の分節構造」との類似性においても注目すべきである。また、

隣接する上台の山遺跡(坂上2002)でも、馬蹄形に展開する24基の炉穴群が発見されており、共通する空間構成を看取し得る。

大網山田台No.4(B)遺跡と大熊仲町遺跡は野島式期、石揚遺跡は野島式から鷓ガ島台式期を中心とする時期と推定され、いずれも条痕文系土器前半に属する事例である。初期環状集落の発生につながる先駆形態として注目しておきたい。

## 2. 最初の環状集落

条痕文系土器後半の早期末葉にいたると、竪穴住居を環状または弧状に配置した、最初の環状集落ともみなせる集落が出現する。

東京都国分寺市恋ヶ窪南遺跡(実川1987)および連続する武蔵国分寺跡遺跡北方地区<sup>3)</sup>(第1図)では、2度の調査で、早期末葉の竪穴住居跡ならびに炉の確認できない竪穴状遺構が合計73棟発見されている。集落形成は入海Ⅱ式期に開始するが、大部分は打越式期の遺構である。集落の規模は長径150mを優に超える大規模なものであり、発掘区域はその西側と北側の一部に留まっているが、住居・竪穴状遺構は環状または弧状に配置されていることがほぼ明らかで、中央に広場空間がある。未発掘部分にさらに多数の住居跡が展開することは確実である。また、竪穴住居群の外周には径1m前後の円形土坑群が弧状に分布しており、その数は調査範囲だけで約60基に上る。土器や礫などの遺物はその円形土坑群と住居群に被さるように弧状に分布する様子が捉えられており、環状集落に特有の廃棄帯の様相を既に示している。これほど整然かつ大規模な集落はそれ以前の段階には見られないものであり、まさしく環状集落の発生を象徴する事例といえる。

そのほか、環状または弧状の住居配置が比較的明瞭な該期の事例として、山梨県一宮町釈迦堂遺跡塚越北A地区(神之木台式～下吉井式期25棟;小野1986)、東京都東久留米市向山遺跡(打越式期;向山遺跡発掘調査団1986)、静岡県三島市乾草峠遺跡(神之木台式期14棟;鈴木1983)、福島県飯館村羽白C遺跡(早期末～前期初頭16棟以上;鈴木1989)などがある。

ただし、これらの諸例をもって環状集落成立の評価を定めることに躊躇がないわけではない。第一に、環状集落の空間構成を特徴づける分節構造と重帯構造は未発達である。これらの構造を環状集落の条件

として重視すれば、早期中葉以前に散見される自然発生的な環状または弧状の集落遺跡(東京都府中市武蔵台遺跡、静岡県富士宮市若宮遺跡等)との本質的な違いがはっきりしない、との批判があり得よう。第二に、該期を代表する大規模な集落遺跡の中にも、環状集落の空間構成を取らない例が少なくない。たとえば、打越式土器の標式遺跡としても著名な埼玉県富士見市打越遺跡では、打越式期・下吉井式の竪穴住居約50棟、炉穴約90基、土坑約30基、掘立柱建物跡1棟などが発見されている(荒井・小出1978・83)。しかし住居は大きく2か所に群在するのみで、広場や環状の重帯構成は明確ではない。

環状集落は早期末葉に発生するが、その数はかなり限定的であり、また構造的にも未完成であったらしい。

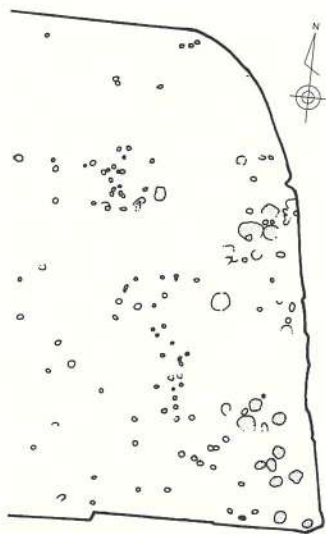
## 3. 前期初頭～前期前葉の初期環状集落

前期初頭～前期前葉(花積下層式・関山式期および併行期)になると、環状集落の事例は確実に増加する(第1図)。特に関東地方と長野県地方でその動きが際立ってくる。

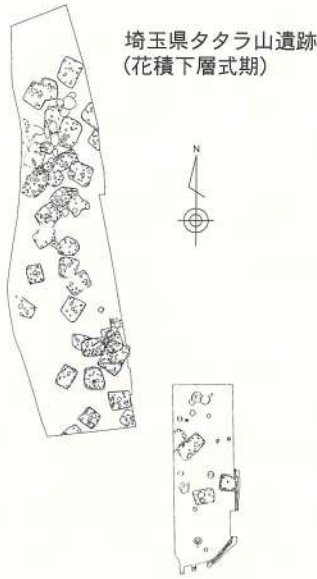
長野県では前期初頭から前期前葉にかけて中越式をはじめとする地域性の強い土器様式が成立するとともに、集落が著しく増加する(長崎・宮下1984)。そして、その活発な動向の中から環状集落が発生してくる。塩尻市矢口遺跡(塚田式・中道式期;小松1994)、宮田村中越遺跡(中越式期;小池・友野1990)、原村阿久遺跡(中越式・関山式期;笹沢・土屋1982)、茅野市阿久尻遺跡(中越式期;小林1993、第1図)、諏訪市十二ノ后遺跡(中越式・関山式期;樋口1976)などが既知の代表的事例である。特に中越式土器を文化的マーカーとする中・南信地方の遺跡群の動向は活発であり、その中から阿久・中越という二大拠点も早くも成立したことは最も象徴的である。

関東地方でも、前期初頭花積下層式期から前期前葉関山式期にかけて、集落数の著しい増加とともに、環状集落は着実に増加した。群馬県赤城村三原田城遺跡(花積下層式期;小野・谷藤1987、第2図)、千葉県沼南町石揚遺跡(花積下層式期;安井1994、第1図)、埼玉県白岡町タタラ山遺跡(花積下層式期;埼玉葛地区文化財担当者会1999、第1図)、埼玉県富士見市打越遺跡(花積下層式・関山式期;荒井・小出1978・83、第1図)、千葉県松戸市幸田貝

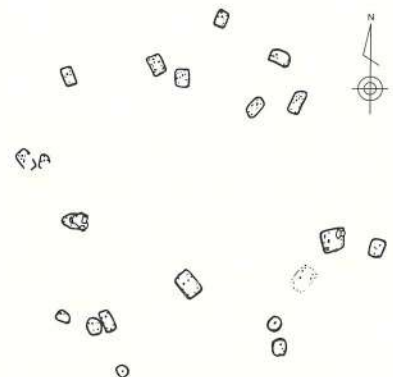
環状集落の成立過程 (谷口)



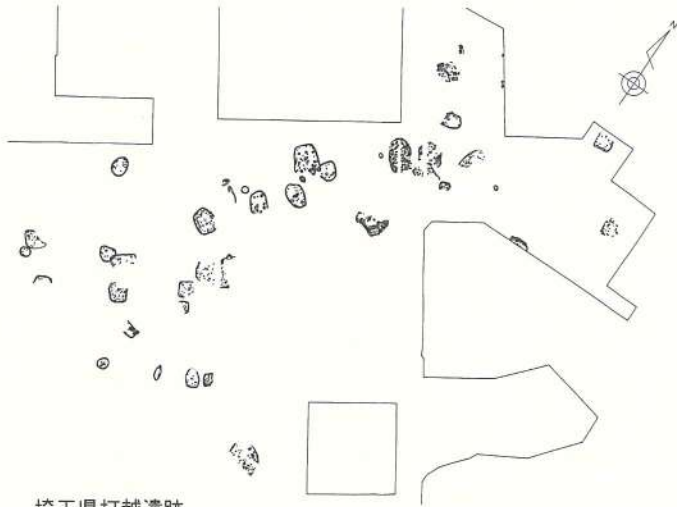
東京都武蔵国分寺跡遺跡北方地区  
(打越式期)



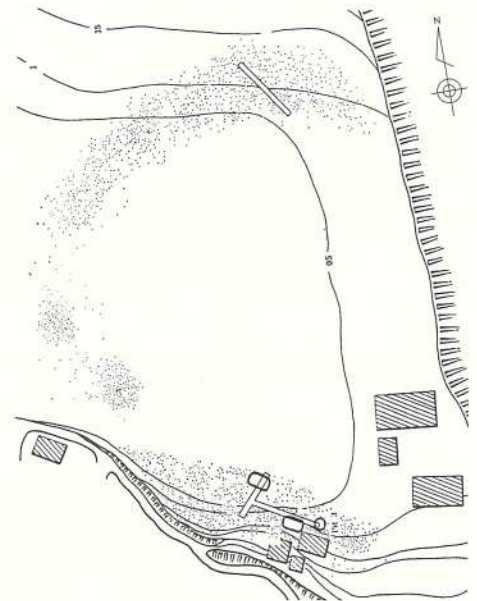
埼玉県タタラ山遺跡  
(花積下層式期)



千葉県石揚遺跡 (花積下層式期)



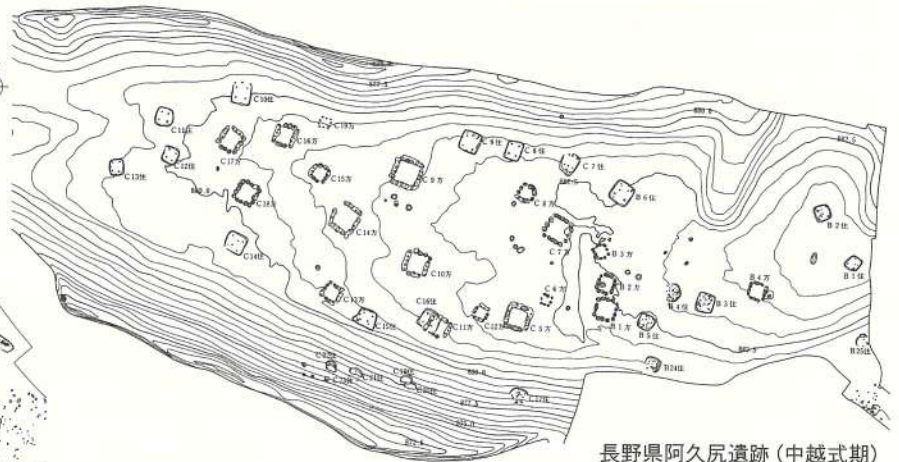
埼玉県打越遺跡  
(花積下層式期)



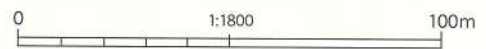
栃木県藤岡貝塚 (関山式期)



群馬県野村遺跡  
(関山式期)



長野県阿久尻遺跡 (中越式期)



第1図 早期末葉～前期前葉の初期環状集落

塚(花積下層式・関山式期;古里2000)、埼玉県さいたま市井沼方遺跡(関山式期;小倉・柳田1998)、群馬県安中市野村遺跡(関山式期;千田・関根2001,第1図)、栃木県藤岡町藤岡貝塚(関山式期;岡本・塚田1962,第1図)、茨城県茨城町南小割遺跡(二ツ木式・関山式期;中村・江幡1998)などが列挙される。

早期末葉に比べると環状集落の事例数は明らかに増加する。この傾向は前期中葉の黒浜式・諸磯a式期へと連続し、環状集落の第一次発達期を実現するに至る。該期はまず数量的増加という意味において環状集落成立過程の実質的な加速点と評価するに相応しい。

#### 4. 重帯構造と分節構造の出現

数量的増加のみならず構造的にも注目すべき変化が現れる。これらの初期環状集落の中には、不鮮明ながら分節構造と重帯構造を発現した例が含まれる。

「重帯構造」とは、堅穴住居・掘立柱建物・墓群などの各種施設をそれぞれ所定の位置に重帯状に配置する構造を指す。長野県阿久遺跡(Ⅱ期集落)と阿久尻遺跡(第1図)では、堅穴住居に囲まれた中央の空間に、大きな柱穴をほぼ正方形に連ねた方形柱列が配置されている。高床式または平地式の建物と見られるが、その機能を明示する具体的証拠はない。阿久遺跡が前期中葉に集団墓を中心とした葬送・祭祀の場としての性格を強めていく過程を重視するならば、この遺構を埋葬儀礼に関係すると推定した土屋積の見解(笹沢・土屋1982)は支持できる。いずれにしても住居群に囲まれた中央広場に特殊な施設が位置付けられていることは事実であり、集落内墓の出現とともに、中央広場に特別な機能が備わりつつあったことを裏付ける。

一方「分節構造」とは、環状集落において住居群や墓群を直径的に区分する構造を指す。二大群は最も顕著な分節構造であり、環状集落が同質な一集団から成り立つものでなく、何らかの分節単位が内在したことを示唆する。中期・後期に顕著な例を見るが、初期環状集落においても住居群などを二分する構造が既に認められる。群馬県三原田城遺跡(第2図)では、8棟以上の堅穴住居が広場を挟んで二列の直列状に配置されている。群馬県内の前期前葉～中葉の集落には直列状に並ぶ堅穴住居群がしばしばみられ、「列状集落」として概念化されているが(大

工原・関根1994)、三原田城遺跡の堅穴住居分布はあたかもこうした単位が広場を挟んで二つ相對しているように見える。長野県矢口遺跡の状況も類似しており、100基以上の土坑が集中する空間を挟んで16棟の堅穴住居が二群に分かれている。長野県阿久遺跡の中越式期(Ⅱa期)集落でも、13棟の堅穴住居が東西二群に明瞭に分かれている。そのほか栃木県藤岡貝塚における南北二群の貝層なども、二群の分節構造を示唆する事例である(第1図)。

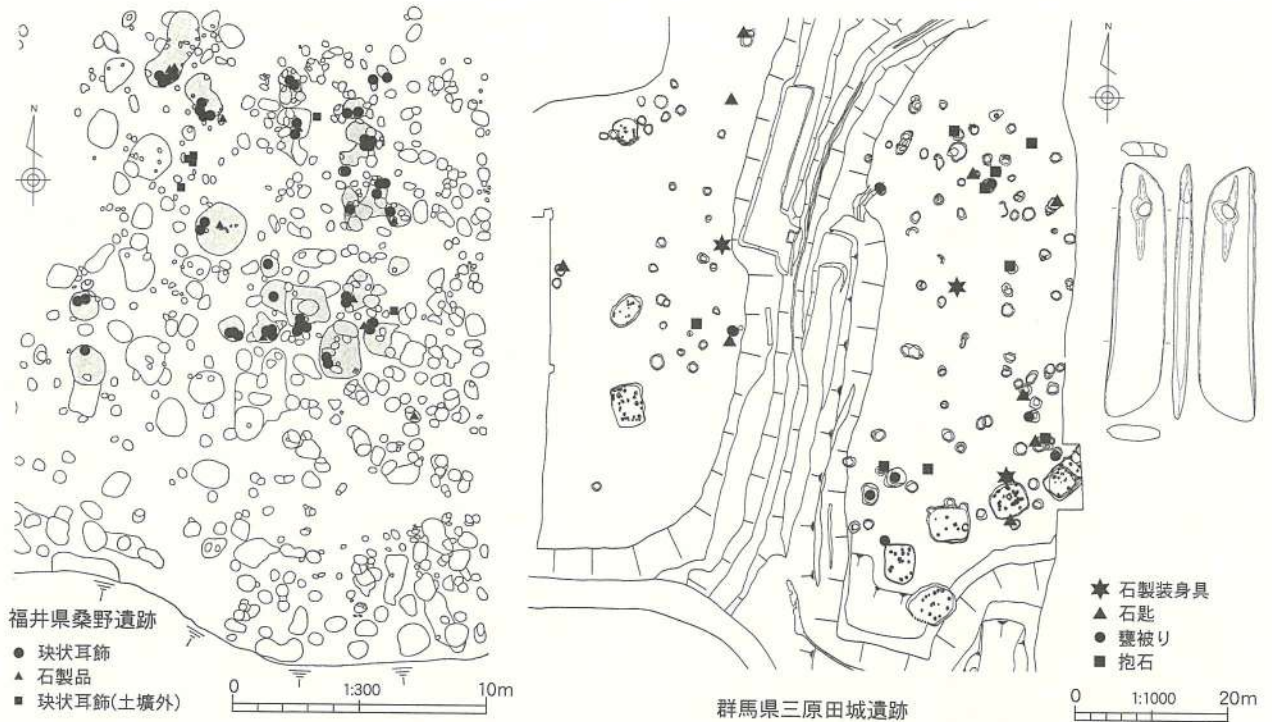
初期環状集落における分節構造と重帯構造は、中期環状集落に比べれば未発達であるが、環状集落の規則的な空間構成を規定する根本的な構造の萌芽としての意義は小さくない。

#### 5. 集落内墓の出現

環状集落が出現した早期末葉～前期初頭は、群集する墓の出現期としても、縄文社会史上に注目すべき画期が印された時期である。また、墓群出現と軌を一にして玦状耳飾や玉類が出現し広く受容された事実も興味深い。そのような最古期の群集墓として、長野県飯島町カゴ田遺跡(友野1978)と福井県金津町桑野遺跡(木下2002,第2図)<sup>4)</sup>の事例が著名である。いずれも集落としての性格は不明確であり、群集する土壙墓群だけが目だった存在となっている。カゴ田遺跡の土坑群は、すべてを土壙墓と断定できないが、総数343基にも達する。桑野遺跡では、石製装身具を出土した土壙墓24基が径10数mの小範囲に密集しているほか、時期の特定は困難であるが周囲にもさらに多数の土坑が分布していて、大規模な墓地の様相を示している。

環状集落の基本的構造は、早期末葉～前期初頭に出現したこのような群集墓が、特定の集落の中央広場に取り込まれることによって成立したものと考えられる。しかも、前項に例示した分節構造は、そのような拠点形成の動きに複数の単位集団が関係していたことを示唆している。

群馬県三原田城遺跡(第2図)では、住居群に囲まれた中央空間に土坑群が造営されており、中世城郭によって一部破壊されているものの126基が残る。径1m前後の円形土坑が多く、玦状耳飾・玉篋等の玉類を出土した3基をはじめ、石匙等の出土からも土壙墓と認定しうる遺構が確実に含まれる。黒浜式・諸磯a式期に発達する集団墓に比べると密集度や単位性に欠けるが、土壙墓を含む土坑群を中央部



第2図 早期末葉～前期初頭における集団墓の出現

に集合的に造営している点は、中央部空間が単なる広場ではなく中心的な機能を備えたものに特殊化してきたことを物語る。初期環状集落の中にも萌芽的な集落内墓が確実に認められるのである。前期における環状集落の成立過程が当初から集団墓の造営と結びついていたことに、特に注意しておきたい。

## 6. 初期環状集落の分布

早期末葉に発生し、前期初頭～前期前葉に増加したこれらの環状集落を、成立過程の初期動向として位置づけ、「初期環状集落」と呼ぶ。初期環状集落が分布する地域は主として関東地方と長野県である。関東・甲信地方はその後環状集落が最も顕著な発達を遂げていく中核地帯であり、まさにその中から発生したことになる。環状集落の分布傾向は遺跡の分布密度の高さと相関関係を有しており、ある程度高い人口密度の中に環状集落を発達させる何らかの社会的要因があったことが示唆されているが、それは発生段階にも妥当する条件になっていたらしい。

これに対して、同じく環状集落の分布圏でも東北地方の場合は、関東・甲信地方に比べて環状集落の出現時期が明らかに遅れる。岩手県・秋田県・宮城県を中心とする東北地方の前期には、ロングハウスとも称される大型住居を放射状に配置した独特な形

態の環状集落が分布する。秋田県協和町上ノ山Ⅱ遺跡（大野・桜田 1988）、岩手県遠野市綾織新田遺跡（佐藤 2002）、岩手県胆沢町大清水上遺跡（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001・02・03）、宮城県築館町嘉倉貝塚（佐藤・三好 2003）などが典型的である。この形態の環状集落が出現するのは、今のところ最も古い綾織新田遺跡の例でも大木 2 b 式期であり、関東・中部編年に対比すれば黒浜式に併行する前期中葉である。栃木県宇都宮市根古谷台遺跡（梁木 1988, 第 3 図）の黒浜式期の環状集落に、東北地方のロングハウスに類似した大型建物がみられるのも、両地域の一脈の関係を示唆するとともに、東北的環状集落の成立時期をみる証左となろう。

東北地方における縄文集落の調査研究は今後委ねられる面も多く、環状集落の成立についてもさらに検討を重ねる必要があるが、現時点の資料から見るかぎり、その成立時期は関東・甲信地方に比べると遅れる傾向にあるといえる。

## 7. 初期環状集落の特徴

初期環状集落は、中期の最も発達した様相と比較してみると、いくつかの異なる特徴を指摘し得る。特に次の二点に注意したい。

① 集落の継続性が弱く、統一的な空間構成を維持

する規制力の持続性に欠ける。

初期環状集落の中に、中期に見られるような圧倒的多数の住居が集中する遺跡が少数に限られるのは、主として継続性の弱さに起因している。中期環状集落には継続的な居住地利用を示す例が多く、しかも広場を中心にした空間構成が長期間踏襲されるため、新旧の住居跡や土壙墓が重複する特徴が生じる。前期前葉までの初期環状集落にはこうした事例はほとんどない。千葉県幸田貝塚、埼玉県打越遺跡、長野県阿久遺跡・中越遺跡のような少数の大拠点を除けば、ほとんどは比較的短期の事例であり、住居数もせいぜい数十棟規模に留まるのが普通である。

打越遺跡は早期末葉の打越式期から前期前葉関山式期まではほぼ継続して営まれ、竪穴住居跡も既に発掘された分だけで約150棟に達し、該期の集落の中では最も継続性の強い一例といえる。しかし、各時期の住居群の配置を見ると、広い台地の中で次々と居住区域が転移しており、同一の広場や居住帯を踏襲する意思はそこからはほとんど窺えない。それどころか前時期の住居跡を避けるように少しずつ居住区域を移している観さえあり、中期の環状集落に見られるような規則的な踏襲性を見出すことはできない。こうした点にも初期環状集落の継続性の弱さと、統一的な集落空間を維持する規制力の弱さが表れている。茨城県南小割遺跡の場合も状況がよく似ている。二ツ木式期と関山Ⅱ式期の2時期の住居跡群が、それぞれ広場を囲み径50~70mほどの集落空間を構成しているが、各時期の住居群は占地を変えており、同一の環の上にはほとんど重複していない。

中期環状集落に特徴的な分節構造と重帯構造が全体に未発達であることも、集落の空間構成を長期間にわたって厳格に統制するだけの規則的な空間認識がまだ確立していないことの表れであろう。二群の竪穴住居群にその萌芽を認め得るとしても、持続性は弱く、系統的で確固とした単位にはまだなっていないらしい。

② 集落内墓を造営する事例が少ない。

群馬県三原田城遺跡の土坑群(第2図)は、環状集落がその初期段階から集落内墓を出現させていたことを例示する点で重要である。長野県カゴ田や福井県桑野遺跡などに見られる土壙墓群形成の動きと環状集落の成立過程は密接不離な関係を有しており、後者のごとき墓群が特定の集落の中央広場に取り込まれることによって、環状集落の基本構造が確

立したと考えられる。

しかし、中央広場に明確な集団墓を形成する初期環状集落は少なく、実は土坑群すら見られない場合の方が多いのである。千葉県石揚遺跡、埼玉県打越遺跡、茨城県南小割遺跡、埼玉県井沼方遺跡、群馬県野村遺跡、長野県阿久遺跡、長野県阿久尻遺跡などでは、中央広場と目される空間が確かに存在するが、いずれも明確な土壙墓群を持たない。ただし埋葬自体が不在という訳ではない。千葉県幸田貝塚第Ⅰ地点38号住居跡(関山式期)では、竪穴住居跡の覆土中から遺体を貝層と土器で覆った状態で埋葬された人骨が発見されている(古里2000)。頭部から胸部には火を受けた痕跡もあった。初期環状集落の中にも埋葬とそれに伴う儀礼の証拠が見出せる。それでも、中央広場に墓域を定めた集団墓は、前期中葉や中期の場合に比べれば明らかに未発達である。

初期環状集落のこうした様相は、中期に比べると拠点的性格がまだ稀薄で継続性も弱かったことを示している。また全体的な密度も低く、幸田・打越・阿久・中越クラスの拠点集落となると、その数はかなり限定されていたものと思われる。

### Ⅲ. 前期中葉における墓群の造営

—統合的な集団墓と個別的な世帯墓をめぐって—

#### 1. 集団墓造営と環状集落の性格

環状集落が、前節で概観したような初期的様相から脱却し一つの変化を顕在化させるのは、黒浜式期から諸磯a式期を中心とする前期中葉のことである。

最も注目される動きは、大規模な集団墓造営の広まりである。前期中葉~後葉の主な集団墓を見ると、非常に多数の土壙墓を集合させた事例が珍しくない(第1表)。200基前後から数百基にも達する多数の土壙墓から成り立つ集団墓が、この時期になると特徴的に出現する。群馬県三原田城遺跡・長野県カゴ田遺跡・福井県桑野遺跡の土坑群などが早期末葉ないし前期初頭に出現した集団墓の萌芽形態として知られるが、前期中葉に至り集団墓はその規模を著しく拡大するとともに群在化を一層顕著なものとする。

また、それらの墓群造営にみられる継続性も、初期環状集落とは明らかに異なる性質である。前期中葉の黒浜式期ないし諸磯a式期に成立した集団墓で

第1表 前期中葉・後葉の主な墓群

遺跡名	墓坑数 <sup>1)</sup>	墓群 形態 <sup>2)</sup>	廃棄帯	副葬品保有墓坑数 <sup>3)</sup>			住居数	墓群造営の時期				文献
				装身具	石器 <sup>4)</sup>	土器 <sup>5)</sup>		黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	
根古谷台	179(約320)	A 1		4	5	0	52	●				文献1)
南堀貝塚	320?	A 1?		詳細未報告			62	●	●			文献2)
阿久(ⅢⅣⅤ期)	約710	A 1	明瞭	3	54	19	33	●	●	●		文献3)
木戸先	約175(570)	A 1	明瞭	7	18	52	8	●	●	●		文献4)
中野谷松原	196	A 1⇒A 2	明瞭	5	7	23	233	●	●	●		文献5)
七社神社前	* 111	A 1		1	6	44	48	●	●	●		文献6)
南羽鳥中岫 1 E	301	A 1		6	6	23	19	●	●	●	●	文献7)
茅ヶ崎貝塚	* 38	A 1		2	10	1	19	●	●	●	●	文献8)
鷺森	約350	A 1		7	29	38	15		●	●		文献9)
天神	* 316	A 1		7	57	35	49			●	●	文献10)
飯山満東	207	A 2		5	2	46	28	●	●	●		文献11)
寺ノ内	49	A 3		0	0	8	0	●	●	●		文献12)
多摩ニュータウン No.753	11	A 3	明瞭	1	0	4	0		●	●		文献13)
雪ヶ谷貝塚	* 52	A 1+B		1	4	14	31		●	●		文献14)
外山	約57	B		0	0	1	35	●	●	●		文献15)
川白田	206	B		0	21	20	22	●	●	●		文献16)
塚屋	* 142	B		0	8	42	23		●	●	●	文献17)
愛宕山	114	B		1	17	30	11	●		●	●	文献18)
糸井宮前	265	B		0	8	8	98	●		●	●	文献19)

注1) \*印を付した例は発掘調査が部分的または墓域の一部が既に破壊を受けているため、実数はさらに多いことが確実なもの。

注2) 第2表の分類による。

注3) 異種副葬品が共存した場合（装身具と土器など）は重複して集計。

注4) 石匙・石鏃・尖頭器等の小型器種と石核を副葬品とみなす。石皿・磨石等の礫石器は抱石の可能性を考慮し副葬品から除外する。

注5) 完形品・小型品の副葬のほか遺体の一部を土器で被覆したと思われる甕被葬を含めて土器副葬とみなす。小破片の出土例は含めない。

文献1) 『聖山公園遺跡Ⅴ』宇都宮市教育委員会1988, 文献2) 『全遺跡調査概要』横浜市埋蔵文化財センター1990, 文献3) 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』長野県教育委員会1982, 文献4) 『木戸先遺跡』印旛郡市文化財センター1994, 文献5) 『中野谷松原遺跡縄文時代遺物本文編』安中市教育委員会1998, 文献6) 『七社神社前遺跡Ⅰ』『同Ⅱ』北区教育委員会1988・98, 文献7) 『南羽鳥遺跡群Ⅱ』印旛郡市文化財センター1997, 文献8) 『茅ヶ崎貝塚』横浜市ふるさと歴史財団2002, 文献9) 『鷺森遺跡の調査』上福岡市教育委員会1987, 文献10) 『天神遺跡』山梨県教育委員会1994, 文献11) 『飯山満東遺跡』千葉県都市公社1975, 文献12) 『千葉県芝山町 大台遺跡群』山武郡市文化財センター1991, 文献13) 『多摩ニュータウン遺跡—No.753遺跡—』東京都埋蔵文化財センター1999, 文献14) 『雪ヶ谷貝塚発掘調査報告書』玉川文化財研究所2002, 文献15) 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県教育財団1982, 文献16) 『川白田遺跡』川白田遺跡調査会1998, 文献17) 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団1983, 文献18) 『愛宕山遺跡』富士見村教育委員会1994, 文献19) 『糸井宮前遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団1987

は、多くの場合、前期後葉の諸磯 b 式ないし c 式期まで継続的に造営が続けられていく。集団墓造営の継続性は、集落としての居住期間を超越している場合さえある。たとえば神奈川県横浜市北川貝塚（坂本・鈴木1984）では、破壊された部分を考慮したとしてもせいぜい数十基の比較的規模の小さい墓群ではあるが、集落が営まれた諸磯 a 式・b 式期に続いて、明確な居住痕跡の残されていない諸磯 c 式期にも埋葬が続けられていた。同じく黒浜式～諸磯 b 式期の環状集落である横浜市茅ヶ崎貝塚（小宮2002）でも、確認された38基の土壙墓の中に諸磯 c 式期の土壙墓が存在する。この2つの環状集落では、居住地としての利用が途絶えた後も集団墓としての機能は継続していたと考えられる。同様の状況は千葉県四街道市木戸先遺跡（高橋・中山・林田1994）や千葉県成田市南羽鳥中岫 1 E 遺跡（宇田・松田1997）でも報告されており、集団墓造営の意識が継続していたことを読み取れる。

前期中葉の環状集落は、中期の場合とは違って必

ずしも集合的な居住地とはなっていないが、このように集団墓造営という面では中心的な機能が維持され、葬送儀礼や祭祀的行為を集中的に行う場に成長していく。千葉県内の前期の集団墓遺跡の様相を整理した西山太郎（2001）の次の指摘も、この点を述べたものである。

- ① 住居数に比べ土壙墓の数が著しく多い例がある。
- ② 住居が残されない時期にも土壙墓のみが存在する例がある。
- ③ 住居が皆無で墓地のみが独立して存在する場合がある。

このような特徴は千葉県に限った特殊性ではなく、前期中葉～後葉の集団墓遺跡に広く共通する様相である。住居数に比して著しく多数の土壙墓が残されたのは、周辺の集落に分散する複数の単位集団が共同で造営する集団墓の成り立ちを示唆しており、いわば地域の共同祭儀場あるいは祖先たちを祀る宗教的センターとしての性格が窺えるのである。

しかし、これは集中度の高い一部の集団墓につい



第2表 前期中葉・後葉における墓群の分類

大別分類	細別分類	特徴	代表例
A：群集性・中心性の強い集団墓	A1：環状集落中央型集団墓	環状集落の中央部に多数の土墳墓が集中する。群集性・中心性が最も強い。複数の分節の小群を含む場合がある。造営期間は最も長期継続的。	根古谷台遺跡 木戸先遺跡 南羽鳥中岫遺跡
	A2：集落内偏在型集団墓	集落内の一定区域に多数の土墳墓が集中する。群集性が強いが、集落内での位置が偏在的。複数の分節の小群を含む場合がある。造営期間は長期継続的。	飯山満東遺跡 中野谷松原遺跡 (諸磯b式期)
	A3：集落外集団墓	集落以外の場所に造営された集団墓。A1・A2に比べ規模は準ずるが、環状廃棄帯を伴うなど環状集落中央広場が独立した中心性をもつ。	多摩NT753遺跡 寺ノ内遺跡
B：緩やかな結合形態を示す集合世帯墓	B：中間型集合世帯墓	住居跡群に重複して土墳墓群が造営されているもの。墓域の輪郭が不明確で、Aタイプ集団墓のような中心性・群集性が認められない。C1タイプ世帯墓が集合した比較的緩やかな結合形態を示す。	愛宕山遺跡 川白田遺跡 糸井宮前遺跡
C：小墓群に個別化した世帯墓	C1：住居跡埋葬型世帯墓	堅穴住居跡の覆土または周囲に小墓群を造営し、住居に関連した単位性を明瞭に示すもの。覆土中の倒立土器(甕被葬)や埋設土器などの埋葬法もある。造営期間短期。	金堀沢遺跡 東光寺裏遺跡 竹之花遺跡
	C2：小群集型世帯墓	小規模な集落の一地点に少数の土墳墓が集合する。Aタイプの集団墓の分節単位となりうる個別的な単位集団墓と推定。造営期間は短期。	復山谷遺跡 多摩NT740遺跡

での説明としては正しいとしても、全般的な説明としては必ずしも正確ではない。前期中葉・後葉における埋葬のあり方を仔細に検討してみると、環状集落が均しくそうした中心的機能をもっていたかどうかは検討の余地がある。以下に検討する墓群の諸様相は、むしろ集落ごとの多様な性格や埋葬行為の意図の違いを浮き彫りにしている。環状集落に造営された集団墓の構成にもいくつかの類型を識別し得るし、他方には小規模集落が個別に営む、世帯墓の性格を窺わせる小墓群が数多く実在する。このような多様さを合理的に説明できないかぎり、環状集落の性格を理解したことにはなるまい。

## 2. 前期中葉・後葉における墓群の諸類型

前期中葉を迎えると、墓群の造営がそれまでになく顕著な動きとなり、それとともに土墳墓への土器副葬などが広がりを見せるようになる。埋葬に表れたこうした変化は、祖先や系譜に対する観念が深まるとともに埋葬行為が社会制度として確立したことを強く示唆するものである。しかし、該期における墓群の様相は画一的なものではなく、環状集落の中央広場に造営された集中度の高い墓群から、小規模な集落が営む個別的な墓群まで、その規模や空間構成が見せる多様さに注意しなければならない。

前期の集落と墓群を検討した鈴木保彦(1988・1991)は、こうした問題に逸早く着目し4種類の抽出を試みた。千葉県内の前期土墳墓群を検討した西山太郎(2001)も諸類型の存在を追認している。墓群の成り立ちを知ることは、それを造営した集団の

姿や紐帯関係の様態を知る上で重要な意味をもつ。

本論では以下のような3大別6細分の分類を行った(第2表)。この分類は、前期中葉・後葉における墓群の多様性を、主に墓の数量、集中度、造営場所、継続性の比較によって類型化したものであるが、その際にまず着目したのは、群集性・中心性の強い大規模な墓群と、特定の堅穴住居跡に付随する個別化した小墓群との、対極的な二者の存在であった。前者が「集団墓」としての性格を強く示しているのに対して、後者の実態は「世帯墓」の性格を示唆している。このように対比的に理解することで、墓群の表面的な多様さが実は異なる社会関係の表示として重要な意味を帯びたものに見えてくる。私見では該期の墓群はA：群集性・中心性の強い集団墓、B：緩やかな結合形態を示す集合世帯墓、C：個別化した世帯墓に3大別すべきであり、それらはさらに少なくとも6類型に細別すべき多様さを含みもつ。

### 2-1. Aタイプ：群集性・中心性の強い集団墓

#### A1：環状集落中央型集団墓

環状集落の中央広場に多数の土墳墓が群集し、中心性の強い墓域が形成されているもの。該期の墓群の中では最も多数の土墳墓が集合するタイプであり、その数は200基前後から数百基に達することがある(第1表)。堅穴住居跡もそれなりに多いが、住居数の10倍~30倍以上に上る土墳墓が一定の墓域内に集中している点に特徴がある。長野県原村阿久遺跡(諸磯a式・b式期; 笹沢・土屋1982)、埼玉県上福岡市鷲森遺跡(笹森1987)、千葉県四街道市木戸先遺跡(高橋・中山・林田1994, 第3図)、千

葉県成田市南羽鳥中岫1E遺跡（宇田・松田1997、第3図）、群馬県安中市中野谷松原遺跡（黒浜式・有尾式期；大工原1996）、栃木県宇都宮市根古谷台遺跡（梁木1988、第3図）、東京都北区七社神社前遺跡（川田・大平1998）、神奈川県横浜市茅ヶ崎貝塚（小宮2002、第3図）、山梨県大泉村天神遺跡（新津・米田1994）などが、この特徴を示している。神奈川県横浜市南堀貝塚（武井1990、第3図）も中央に土坑群の存在が報じられており、同類の墓群の存在が推定されるが、数量・分布状態などの詳細は未報告のため不明である。

このタイプの墓群には、不鮮明ながら分節的小群を認め得る例がある。木戸先遺跡の中央墓群約175基には、密集重複の著しい4小群が見出せる（高橋・中山・林田1994）。中野谷松原遺跡の有尾式期の墓群では3ないし4小群が区別でき、大工原豊（1998）は各小群の間に時間差を認めている。鷲森遺跡では7小群が区別され、笹森健一（1987）の分析によれば、小群によって装身具の副葬率や埋葬頭位に区別が認められる。また、未発掘部分を残し詳細は不明であるが、根古谷台遺跡の墓群にも同様の小群が含まれるらしく、美しい装身具類を副葬した土壙墓が特定の小群に集中する傾向があるとの注目すべき指摘がある（梁木1988）。埋葬小群の存在は、集団墓が複数の単位の結合によって成り立っていたことを示唆しており、おそらくそれが土壙墓数を著しく多くする理由になっていたものと思われる。

墓群の造営は継続的である。居住地としての継続性は必ずしも随伴しないが、居住痕跡の有無に拘らず、葬送行為を長期にわたり継続して行う特徴がある。また墓域の周囲では、埋葬時あるいは埋葬後の儀礼・祭祀的行為が行われていたらしく、こうした行為に伴って墓域を圍繞する環状の「廃棄帯」<sup>8)</sup>が形成されることがある。環状廃棄帯については後段で詳しく検討する。

#### A 2：集落内偏在型集団墓

環状集落広場のやや偏った一部分に密集する墓群を造営するもの。環状集落中央型に対して集落内偏在型とも呼べようか。千葉県船橋市飯山満東遺跡（古内・清藤1976、第3図）と群馬県安中市中野谷松原遺跡（諸磯b式期；大工原1998、第4図）がこの特徴を示している。墓域が集落中央でなく偏在している点を除けば、土壙墓数の多さや密集度はA1タイプにはほぼ共通している。飯山満東遺跡では前期

中葉・後葉の堅穴住居跡が発掘範囲だけでも29棟検出されているが、住居の分布はやや散漫であり、環状集落に見る求心的な空間構成は一見したところでは明確でない。

#### A 3：集落外集団墓

密集する墓群が集落から独立した場所に造営されているもの。千葉県芝山町寺ノ内遺跡（渋谷1991）、東京都多摩市多摩ニュータウンNo.753遺跡（栗城・原川1999）の2例が知られる。

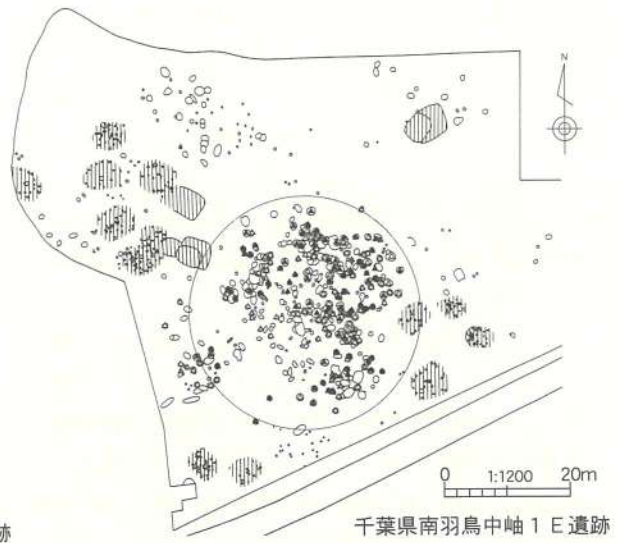
寺ノ内遺跡では、黒浜式・諸磯a式・浮島I式・同II式期にわたる土壙墓49基が見出されている。ほとんどの土壙墓は、舌状台地のほぼ中央にあたる径10～15mほどの特定の場所に群集している状態で、重複が生じている。発掘された範囲では周囲から該期の堅穴住居跡は発見されていない。痕跡を残さないような建物が存在した可能性までは否定できないが、少なくとも堅穴住居を構える集落からは独立して墓群が造営されていたものと考えられる。

多摩ニュータウンNo.753遺跡では、土壙墓11基が集中する場所を中心に、その周囲に土器・石器などの多量の遺物を含む廃棄ブロックが環状に分布している状態が捉えられている（第5図）。丘陵尾根の踊場状の平坦面に立地し、周囲から堅穴住居跡は発見されていない。諸磯a式新段階からb式古段階への比較的短期間で造営が終了したため土壙墓数は少ないが、墓域の周囲から出土した遺物量はきわめて膨大であり、累積的な葬送行為の痕跡が残されている。その分布状態はA1タイプの木戸先遺跡などに見られる環状廃棄帯に類似しており、環状集落の中央広場と集団墓の機能だけが切り離されて独立したものと理解すべきであろう。

同遺跡が位置する東京西部の丘陵地帯には、前期中葉～後葉の集落遺跡が密集しているが、居住形態は総じて分散的で、小規模な集落が多数ある半面、拠点的な環状集落の形成が見られない。しかも、諸磯a式新段階からb式古段階は、当地域において小規模分散傾向が最も強まった時期に該当している（谷口2003b）。分散するそれらの集落のいくつかは、このような中心的な集団墓を媒介として、地域社会としての紐帯関係を保っていたものと推定される。

#### 2-2. B：緩やかな結合形態を示す集合世帯墓

堅穴住居跡とその周囲あるいは住居群の間隙に墓群を造営するもの。集団墓と世帯墓との中間的な性格が認められ、中間型集合世帯墓と呼んでおく。群



第3図 前期中葉・後葉における墓群の諸類型 (1)

馬県富士見村愛宕山遺跡（羽鳥・松田1994, 第4図）、群馬県前橋市川白田遺跡（大賀1998）、群馬県昭和村糸井宮前遺跡（関根1987, 第4図）、同中棚遺跡（富澤1985）、茨城県石岡市外山遺跡（山本1982, 第4図）、東京都大田区雪ヶ谷貝塚（戸田・新井・館2002）、埼玉県寄居町塚屋遺跡（市川1983）などがこの特徴を示している。ただし雪ヶ谷貝塚例はAタイプとの複合形態の可能性もある。

Aタイプの集団墓に比べると墓域の輪郭が明確でないため、土壙墓とそれ以外の土坑との識別が難しくなるが、竪穴住居跡覆土やその周囲に土壙墓を造る埋葬法は後述するC1タイプ世帯墓の特徴と合致しており、個々の住居跡に付随する小規模な埋葬単位が集合して一種の集団墓を構成したものと考えられる。ただしAタイプ集団墓のような群集性・中心性はなく、比較的緩やかな集合状態を示している。土壙墓数はA1タイプやA2タイプに比べて少ない傾向がある（第1表）。外山遺跡・雪ヶ谷貝塚のように集落形態が環状となる場合もあるが、求心的な空間構成を取らず一見不規則な例がむしろ多い。

愛宕山遺跡では、諸磯b式期の12棟の竪穴住居跡に付随するように約130基の土坑が見出されている（第4図）。土坑の分布は居住区域と一体となっており、竪穴住居跡と重複するものも多い。土壙墓の可能性のある円形・楕円形土坑が114基あり、形態や土器副葬例から見ても相当数が該当することは疑いない。糸井宮前遺跡（黒浜式・有尾式期、諸磯b式・c式期）では、土壙墓の可能性のある265基のうち竪穴住居跡と重複する例が112基もあり、住居跡の周囲に位置するものも多い（第4図）。同遺跡では諸磯b式新段階からc式期にかけての竪穴住居跡が特に多く、該期の集落跡としては関東・中部地方でも最大例として知られるが、これほど大規模な集落跡でありながらその形態は環状集落の求心的な空間構成を取らない。土壙墓群がAタイプ集団墓のような群集性・中心性を備えていないのも、こうした集落空間構成に関係し、比較的緩やかな結合形態を反映したものであろう。外山遺跡では竪穴住居群に囲まれた中央部に径35mほどの広場空間が作り出されているが、その部分に遺構はほとんどない。土壙墓を含む土坑群は竪穴住居の分布に完全に重複しており、住居跡との重複関係も目立つ（第4図）。雪ヶ谷貝塚では中央広場と考えられる空間にも土壙墓群があるが、中央部分に残された24基に対し、竪

穴住居跡の周辺に13基、竪穴住居跡の覆土に10基が分布しており、半数近くが竪穴住居跡とその周辺にある。川白田遺跡（黒浜式・諸磯a式・b式期）の場合は、22棟の竪穴住居跡の周囲に土壙墓の可能性の強い200基前後の土坑が密集しているが、住居跡との重複は3基のみで他の事例とやや様相が異なる。

球状耳飾などの美しい石製装身具や石匙の副葬例はAタイプの集団墓に比べて少なく、皆無の場合もある。墓としての認定を疑わせるような状況であるが、副葬品・甕被り・抱石などは一定の出現頻度を示しており、Bタイプだけを墓群から除外する理由にはならない。むしろ墓群による何らかの格差や埋葬取り扱いの差を注意深く検討すべきであろう。

### 2-3. C：個別化した世帯墓

#### C1：住居跡埋葬型世帯墓（金堀沢タイプ）

小規模な集落に付随する個別的な小墓群の一種で、廃絶後の竪穴住居跡の覆土内に重複して数基の土壙墓が造られるもの。土壙墓が住居跡の周囲に造られる場合も多い。特定の竪穴住居跡とその周囲に付随して数基から10数基程度の比較的小規模な墓群が造営される特徴がある。

このタイプの墓群は、埼玉県入間市金堀沢遺跡（中島1977, 第5図）で最初に注意されたものである。同遺跡では、諸磯a式新段階からb式古段階の2棟の竪穴住居跡とその周辺から17基前後の円形土坑が密集して発見された。そのうちの7基は廃絶された住居跡の内部や壁際に掘り込まれており、その分布状態は一見ただけでも偶然の重複とするには不自然である。その他の円形土坑も2棟の住居跡の周囲だけに付随している。調査者の中島宏（1977）は、埼玉県岡部町東光寺裏遺跡にも酷似する事例があることを指摘し、千葉県飯山満東遺跡の集団墓とは趣の異なる一種の墓群としての性格を想定する見解をこのとき既に示していた。

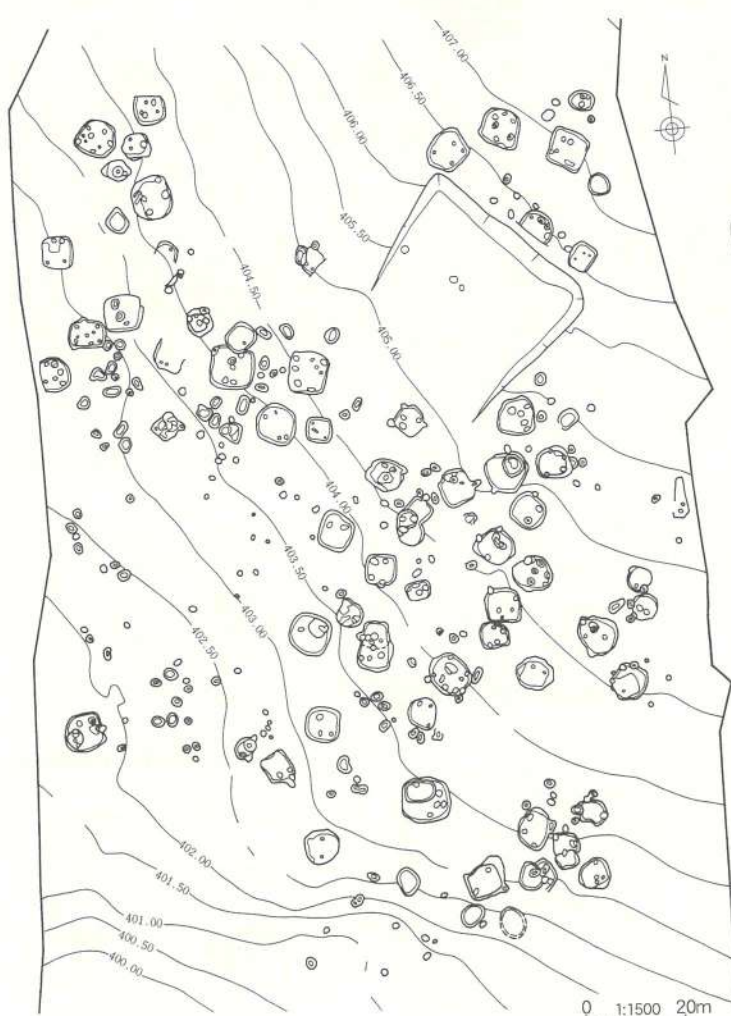
金堀沢例に酷似する小墓群は関東地方を中心に広く存在しており、前期中葉～後葉における普遍的な墓群の一形態として再認識すべきである。特に諸磯a式～b式期に多くの事例を見出せる。この種の小墓群をここでは住居跡埋葬型世帯墓と称するが、問題を提起した遺跡に因み「金堀沢タイプ」と呼ぶのも簡便である。

東京都八王子市多摩ニュータウンNo.424遺跡（宇佐美1996, 第5図）では、諸磯a式期に属する1棟の竪穴住居跡と周囲から8基の土壙墓が発見されて

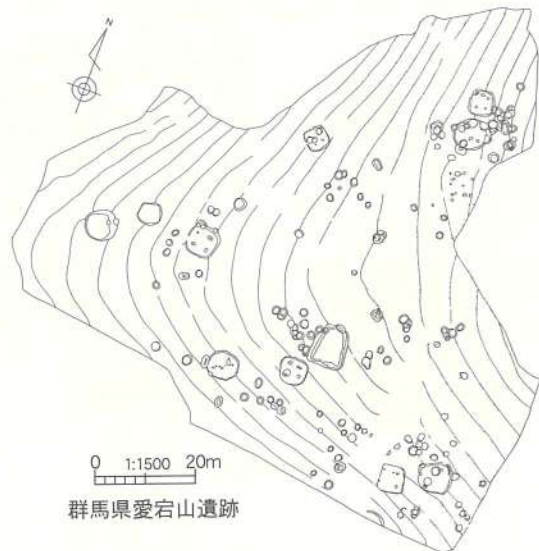


群馬県中野谷松原遺跡 B区南群墓群 (諸磯b式期)

千葉県復山谷遺跡 (黒浜式期集落・墓群)



群馬県糸井宮前遺跡 (諸磯b式・c式期竪穴住居・土坑群)

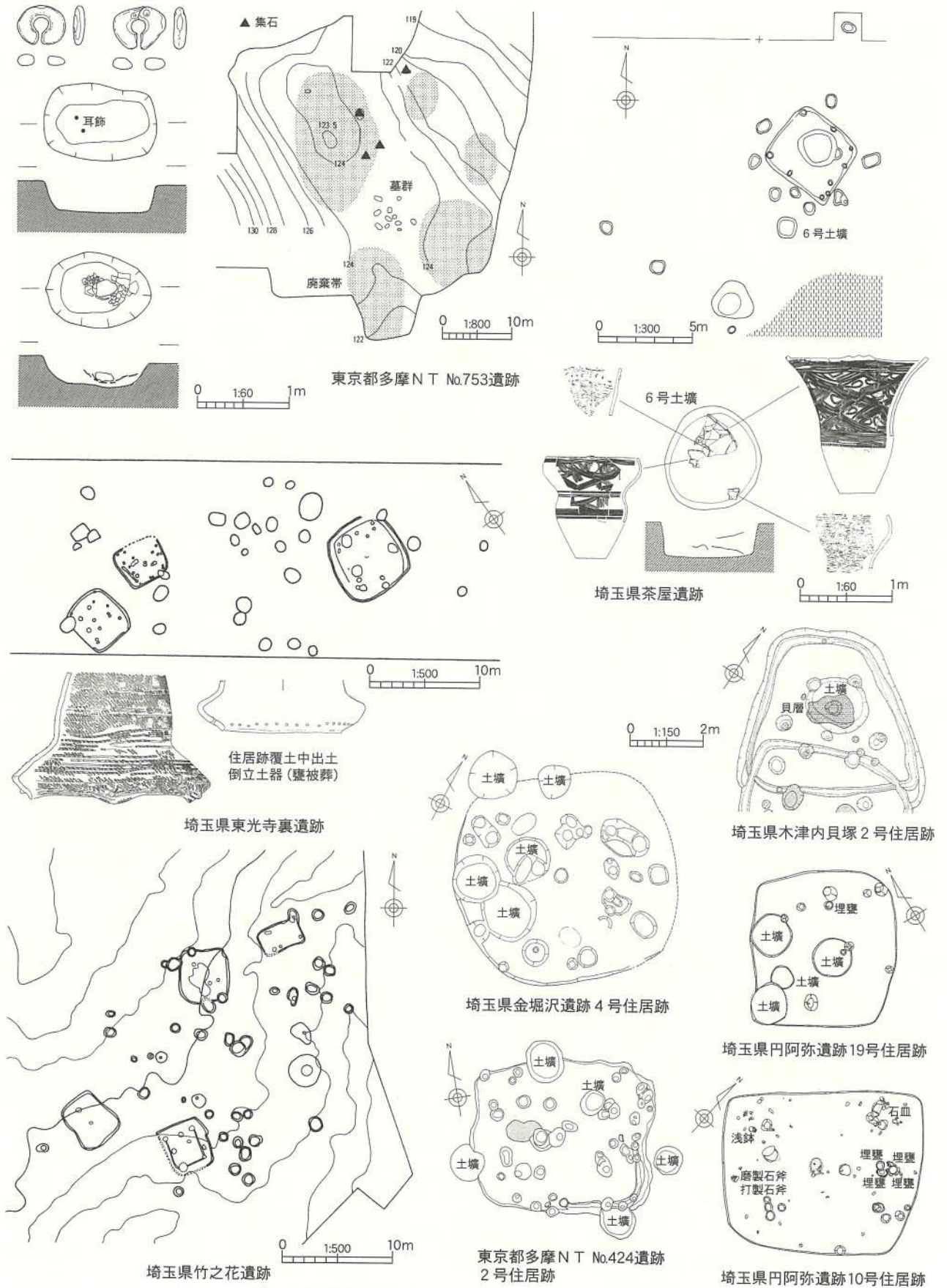


群馬県愛宕山遺跡



茨城県外山遺跡

第4図 前期中葉・後葉における墓群の諸類型 (2)



第5図 前期中葉・後葉における墓群の諸類型 (3)

いる。8基の内の4基は竪穴住居跡と重複しているが、遺構の切り合い関係からいずれも住居跡を壊して土壙墓が造られた可能性が示されている。あたかもこの住居にかつて居住した人々が、住居跡内や周囲に次々と埋葬されたようである。居住者の全員分とは断定できないまでも、住居に関係する人々の墓地であったことは、このような不自然な分布状態を見れば察知できる。土壙墓の中には、副葬された土器の型式が住居跡出土土器の型式より若干新しい例も含まれており、ある程度の期間にわたり墓群の造営行為が順次続けられたものと思われる。

埼玉県白岡町茶屋遺跡(西井・鈴木1984, 第5図)でも、諸磯b式期の1棟の竪穴住居跡内とその周囲に付随した状態で10基の土壙墓が見出されている。それらがすべて住居跡の内部か周辺に位置していることは偶然とは考えられず、やはり住居跡と埋葬との断ちがたい関係が窺えるのである。竪穴住居跡の中央部に掘り込まれた一際大きな円形土壙は、埼玉県杉戸町木津内貝塚2号住居跡(黒坂2003, 第5図)、神奈川県横浜市西ノ谷貝塚J33号住居跡(坂本2003)、東京都多摩市多摩ニュータウンNa740遺跡3号住居跡(齊藤1984)などに酷似する類例があり、合葬墓の疑いが濃い。

埼玉県川本町竹之花遺跡(利根川1991, 第5図)では、竪穴住居跡に付随する土壙群が全面的な発掘調査によって明瞭な形で把握されている。3~4棟の竪穴住居跡を残す小規模な居住地跡が黒浜式期、諸磯a式期、諸磯b式期にそれぞれ別地点に残されたが、いずれの地点でも竪穴住居跡とその周囲だけに土壙墓と推定される円形土坑群が集中的に分布している。第5図にそのうちの1か所を示したが、この部分では4棟の竪穴住居跡とその周囲だけに限定して約40基の円形土坑がある。多摩ニュータウンNa424遺跡や茶屋遺跡に見られた最小単位群が数単位、重複ないし集合している状態と考えられる。埼玉県飯能市天王前遺跡における竪穴住居跡4棟と土坑群(18基)の状況も酷似している(富元2003)。

金堀沢タイプの墓群を把握する上での一つの支障は、竪穴住居跡内に掘り込まれた土壙墓の中で、住居床面に達しない浅いものが発掘調査時に見落とされている疑いがあることである。埼玉県岡部町東光寺裏遺跡では、諸磯b式期の3棟の竪穴住居跡の周囲から土壙墓と思われる約32基の土坑が発見され、金堀沢例と同様に竪穴住居跡との重複が見られる。

7号住居跡の覆土中からは、壁際に重複する1基の土壙墓のほかに2個体の倒立土器が床面から多少上位のレベルで出土している(中島1980, 第5図)。明確な土壙は確認されていないが、甕被葬の蓋然性が強い。こうした可能性も考慮すると、これらの住居跡に付随した埋葬数は、記録されている土壙数をさらに上回るものと推定されるのである。

また、埼玉県川本町円阿弥遺跡では、3棟の竪穴住居跡で床面に埋設された埋甕が検出されているが、それらはいずれも住居床面から突出しており、居住時の付属施設と見るにはあまりにも不自然な状態である(利根川1991, 第5図)。むしろ住居廃絶後に掘り込まれた可能性を考慮すべきであり、重複する土壙と同じく住居跡内埋葬に関係したものと推定し得る。10号住居跡ではこの種の埋甕4基のほか抱石の可能性のある石皿や副葬品らしき浅鉢も出土している。このように覆土中の倒立土器や床面から突出した埋甕などの中にも、住居跡への埋葬事例が少なからず含まれていると見た方がよい。

縄文時代中期に廃絶後の竪穴住居跡への埋葬を行う葬制があることは周知の事実であり、廃屋葬あるいは住居跡覆土葬などとして概念化されている(山本1985b、堀越1986等)。廃絶された住居跡への埋葬は、千葉県幸田貝塚第I地点38号住居跡(関山式期)の埋葬人骨などに見るように前期にも存在する。中期の住居跡内埋葬との関係についてはまだ明確でないが、竪穴住居跡を強く意識したC1タイプの埋葬小群もおそらくその一形態である。各住居跡に伴う土壙墓数がせいぜい10基前後であることも、ちょうど2世代程度の世帯的關係を想起させる。墓としての決定的証拠を欠く事例が多いが、世帯墓の性格をもつ個別的な墓群の一形態として改めて注意を喚起しておきたい。

#### C2: 小群集型世帯墓

小規模な集落に伴う個別的な埋葬地の一種で、墓群が住居からやや離れて位置し、少数ながら群としてのまとまりをもつもの。千葉県白井市復山谷遺跡(清藤1978)、東京都多摩市多摩ニュータウンNa740遺跡(齊藤1984)の墓群が好例である。

復山谷遺跡は、黒浜式期の竪穴住居跡2棟が残された小規模な集落遺跡である。2棟の竪穴住居跡から10mほど離れた位置に、12基の土壙墓が集中する墓群が形成されている(第4図)。広い空間が周囲にあるにも拘らず、土壙墓は径6mほどの範囲に密

集しており、重複が生じている。2棟の住居に関係する人々の墓域と推定される。

多摩ニュータウンNo.740遺跡では、諸磯b式・c式期の住居跡3棟が散在する集落跡の一角に、16基の土壙墓が群在している。土壙墓同士に重複はなく、3～4基からなる小単位が集合して一つの群を構成しているらしい。懸け離れて散在する3基を除けば16基の土壙墓は径20mほどの小範囲に明らかに集中している。比較的短期間であったにせよ、この場所での墓群造営の意識が継承されていたことが窺える。そのほか群集性にやや欠けるが、東京都八王子市宇津木台遺跡N地区でも小規模な墓群と見られる土坑群が発見されている（中西1983）。

A1タイプやA2タイプに比べると土壙墓数はきわめて少ない。それは墓群の造営期間が短いことに加え、関与する集団が単一または少数であることによるのではなかろうか。小規模ではあるが密集性があり墓域の意識が強い点は、Aタイプに一脈通じる。わずか12基の小群にも拘らず4基に玉や土器が副葬されていた復山谷遺跡のあり方からは、丁寧な埋葬の取り扱いが窺える。また、多摩ニュータウンNo.740遺跡の墓群の周辺に複数の集石土坑が分布していたことも、阿久遺跡の環状集石群を連想させる。こうした点にAタイプ集団墓の縮小版または小単位としての性格が窺える。

### 3. 等質でない埋葬行為の意味

以上の分類と比較を通じて、前期中葉・後葉の墓群が含みもつ多様さが改めて浮き彫りとなった。とりわけ重要な点は、その中に群集性の強い集会的な墓群と個別的小墓群とが併存している実態である。環状集落に造営される集団墓と、個々の堅穴住居跡に付随する個別的小墓群のような異質な墓が、同時期に併存するのはなぜだろうか。また、墓群に認められた多様な形態差は何に由来するのか。わずかな副葬品と墓群の空間構成だけからこうした問題を論じるのはもとより困難であるが、埋葬行為が等質なものでなく、墓地によって社会的な格付けや意味の違いがあったことを強く疑わせる。

A1タイプ、A2タイプ、A3タイプの3類型は、多くの集団が関与する集団墓としての性格を備えている。最も多数の土壙墓が群集し、かつ求心性が強いのは、環状集落の中央広場に墓群を造営するA1タイプである。A2タイプにもそれに準ずる性格が

認められる。A3タイプは群集性と継続性を欠く面があり、やや規模が小さいが、A1タイプ集団墓の機能だけが集落の外部に独立した形態をとるもので、やはりある程度求心的な性格をもった墓群と推定される。土壙墓数、集中度、墓域の位置、副葬品の出現頻度、墓群造営の継続性、儀礼・祭祀行為などの様相は一様ではなく、すべてを同質の集団墓とみることは適切でないが、これらの墓群が環状集落の構造と不可分なものであることは明確である。

一方、C1タイプとC2タイプは分散的な居住単位でもある小規模な集団が個別に墓地を造営したものであり、個別的小墓群としての性格を示している。特に堅穴住居跡に付随して小墓群が形成されたC1タイプ（金堀沢タイプ）は、個々の住居と墓群との断ちがたい関係を明示しており、世帯的な関係で繋がる基礎的な単位集団の姿を反映している。C2タイプはAタイプの集団墓に一脈通じる群集性を持ち、その最小単位としての性格を窺わせる。このような最小単位集団が複数結びついて、特定の場所に集団墓を継続的に造営する時に、数百もの土壙墓からなる集団墓が形成されるものと考えられる。

さらに、集団墓と世帯墓との中間的な性格をもつのがBタイプの集合世帯墓である。Aタイプ集団墓に比肩する多数の土壙墓が集合しているながら、Aタイプに見られたような明確な群集性・求心性を示さないのは、世帯と考えられる単位集団がある程度の自立性を保ちつつ、緩やかな結合形態で集合している状態を反映しているものと考えられる。Bタイプの墓群を擁する集落遺跡に環状集落の形態を取らない場合が目立つのも、比較的緩やかな統合形態と規制力の弱さを反映したあり方であろう。Bタイプ集合世帯墓の最小単位となったのは、おそらくC1タイプ（金堀沢タイプ）の世帯墓を営んだのと同質の集団であった。

統合的・集会的な性格を帯びたAタイプの集団墓に対して、Cタイプの個別的小墓群は個々の単位集団の自立性を窺わせており、墓群の造営という社会的行為の中に、一見矛盾する二つの方向性があることが注意されるのである。該期の墓群を、当の集落の住人たちが区別なく埋葬された墓地と単純に理解すべきでない。特に集団墓と個別的小墓群との違いは、単に造営期間の長短に起因した規模の違いだけではなく、異なる社会関係を反映した性格の違いとして認識すべきである。また、中心性・群集



性が強いA1タイプと個々の住居との結びつきが強いBタイプとの差違なども、被葬者たちを結び付けていた社会的関係や統合状態の違いを示唆する。

#### 4. 墓群にみる統合化と個別化との二極

前期中葉に至り墓群造営の動きがそれまでになく顕著なものとなるのは、祖先や系譜の観念が強まり、葬送や祖先祭祀が社会制度として確立してきたことの表れであろう。ただしここで改めて強調しておきたいのは、埋葬行為がそれぞれの集落で均質的に行われていたのではない、という点である。

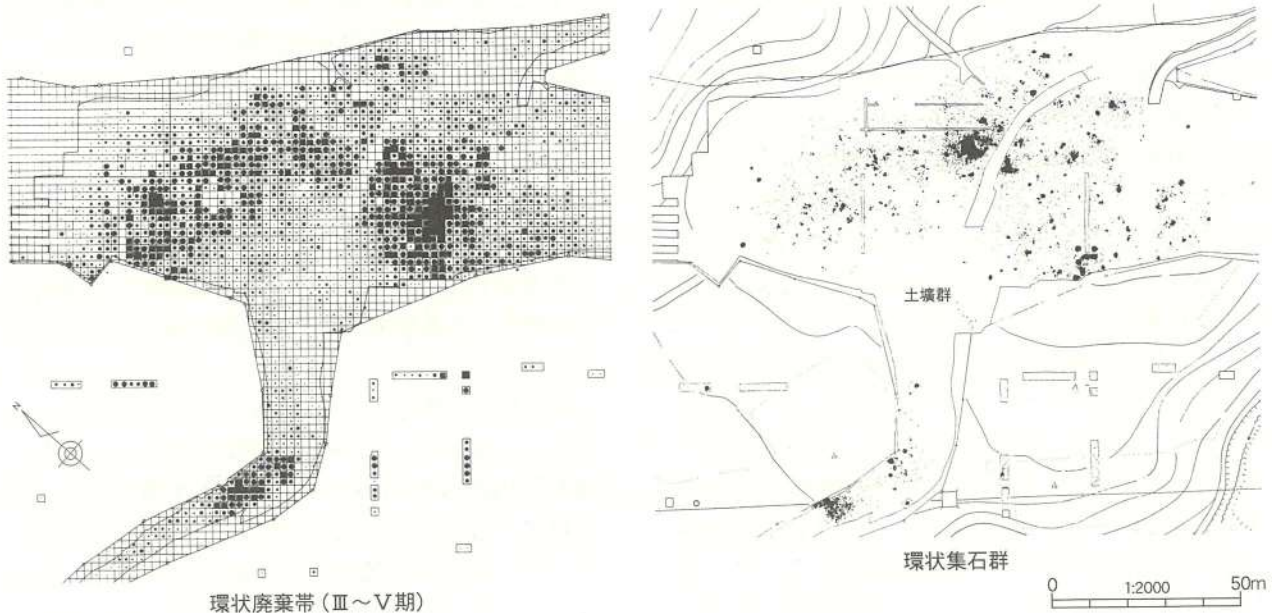
環状集落に造営された集団墓と特定の堅穴住居跡に伴う世帯墓とでは、埋葬行為の意味が大きく相違していた可能性が高い。後者は共住単位である家族もしくは少数世帯からなる単位集団が個別に行う埋葬行為であり、家族的・世帯的な紐帯関係に基づいている。こうした個別的な埋葬が広く行われていたのは、家族ないし世帯がある程度の自立性をもって存在したことを示しており、社会の内部にこうした自立的な小単位が次々と生み出されていた状況が読み取れる。それに対して前者は、そのような多くの単位集団を結びつける、より大きな組織の存在を示すものである。個別的な世帯墓が比較的短期間のうちに完結する性格をもつものに対して、集団墓は継続性をもつ点でも異なっている。要するに、集団墓と個別的な世帯墓は等質な埋葬行為とはいえ、異なる社会関係を背後にもつのである。

その違いを分かりやすく概念化するならば、「統合化された大きな組織」と「個別化する単位集団」という二極によって表現できる。最も象徴的なA1タイプの集団墓とC1タイプ（金堀沢タイプ）の世帯墓を対比して説明する。

A1タイプの集団墓を伴う環状集落は、複数の単位集団が関係する拠点としての性格が最も色濃いが、ただしすべてのメンバーを無差別に葬る集合墓地ではないらしく、配偶者を除く血縁者とか特定の社会的地位をもつ人物などが選択的に埋葬された可能性がある。

中野谷松原遺跡の集団墓を分析した大工原豊(1998)は、住居数と床面積から推計した集落の居住人員と土壙墓数との対比から、ここに埋葬されたのは居住者の全員ではなく、せいぜい半数程度であることを明らかにした。残りの約半数は別の場所に埋葬されたことになるが、大工原はこれを集落の移住によって説明し、移住先に別の墓地の存在を推定している。はたして大工原が想定するように死亡した場所に埋葬されただけなのか。それとも何らかの基準・資格によって埋葬場所が選別された結果なのか。後者の場合を考慮すると、たとえば血縁上直系にあたる人物とか配偶者を除く出自集団成員などが、選択的に埋葬された可能性も大きいように思われる。

墓群の内部においても、ある種の不均等が認められる場合がある。鷲森遺跡の墓群では、7単位ほどの小群のうちの一群だけに石製装身具類が集中して



第6図 長野県阿久遺跡の環状廃棄帯と集石群

おり、笹森健一（1987）はムラ出身の女性を選択的に埋葬した場所ではないかと推定する。根古谷台遺跡でも、特定の小群に石製装身具類が集中することが注意されている（梁木1988）。同じ集団墓に葬られた被葬者たちの中にも、さらに何らかの区別があったのかもしれない。

中央の墓域を取り囲んで環状の「廃棄帯」や集石群が残されている例があることも、A1タイプにおける埋葬行為の格付けの高さや求心性を物語る。長野県原村阿久遺跡（諸磯a式・b式期）では、約710基の中央土坑群を圍繞して約250基の集石土坑を含む集石群が築造されており、その圏帯に重複して、きわめて明瞭な形で「環状廃棄帯」が形成されている（笹沢・土屋1982、第6図）。集石群の礫には、集落に伴う一般的な集石の場合とは違って繰り返し加熱使用した痕跡がなく、埋葬時あるいは埋葬後の祭儀に際して、儀式的な炊爨と共食が行われた可能性がある（谷口1986）。千葉県四街道市木戸先遺跡でも、約175基の中央土壙墓群を取り囲んで土器などの遺物が一定の圏帯に分布する、典型的な環状廃棄帯が形成されている（高橋・中山・林田1994）。その時期は黒浜式期から諸磯b式期に及ぶ。

環状廃棄帯は、単一の時期に築造された一つの遺構ではなく、墓域の周囲で執り行われる何らかの行為の継続によって結果的に形成されたものである。それが明瞭な環状の構造物に統一され得たのは、墓域に対する求心的な意識が継続していたからに違いない。A1タイプの集団墓では、土壙墓への遺体の埋葬だけではなく墓域を取り囲む空間で何らかの祭儀が繰り返し行われていたことが強く示唆されている。個々の埋葬に際した葬送儀式はもとより、墓域全体に対する祭祀的行為が大勢の結集の下に定期的に行われていたのではなからうか。環状廃棄帯の性格を継続的な祭儀の場と推定する以上の私見が容れられるならば、その被葬者たちは祭祀の対象になっていた可能性さえ見出せるのである。

一方、同じ埋葬行為でもその対極にあるのがC1タイプ（金堀沢タイプ）の世帯墓である。それは特定の住居との関係が深い埋葬であり、被葬者は当の住居の元の居住者たちであった可能性が高い。居住者の全員かどうかは断定できないが、1棟の住居跡に伴う土壙墓数がせいぜい10基前後であることから見ても妥当な推定であろう。この小墓群から窺えるのは自立化・個別化する世帯の姿である。

そして、こうした世帯単位が一定の自立性を維持したまま集合したものがBタイプの集合世帯墓と見られる。複数の単位集団が関係する集団墓としての性格は窺えるが、A1タイプに比べて群集性と中心性に欠けるのは、単位間の紐帯関係が比較的緩やかで、むしろ被葬者と各世帯・家族との関係が重視されていることを示唆している。求心性の強いA1タイプと自立性の強いC1（金堀沢タイプ）との中間的な統合形態をそこに見出すことが可能である。美麗な石製装身具や石匙の副葬例がA1タイプに比べて少なく、皆無の場合があることも、埋葬の社会的位置づけの差違を示唆する。

要するに、前期中葉の埋葬に見られる多様さは、一面では個別化・自立化する世帯単位の存在を示しているながら、他の一面ではそれらの分子を一つの中心（環）に統合しようとする組織的な動きを示しているのである。多数の集落の中から一部の環状集落が拠点に成長していく過程は、個別の単位集団が自立化傾向を強める中で、集団墓の造営を核としてそれらを求心的に統合する組織が出現したことを意味しているように思われる。環状集落の成立過程が前期中葉に一応の完成点を迎えたと評価するのは、そこに画期的な社会史的意義を認めるからである。

#### IV. 拠点形成の意味

##### 1. 遺跡群の中の環状集落

早期末葉～前期初頭に開始した環状集落の成立過程は、前期中葉における集団墓造営の動きによって大きな進展をみた。複数の単位集団が関係する集団墓が、特定の集落の中央広場に取り込まれることによって、環状集落の基本構造が完成したと評価することができる。居住地としては必ずしも大規模ではなく、当初から地域人口の多数が集中する拠点的なムラとして存在していたわけではないが、集団関係の結節点となる機能的な中心地が出現したことは確かである。

環状集落の機能・性格についてはさまざまな議論がある。和島誠一（1948）は環状集落がもつ中央広場を「大規模な集団の統合の要」として重視した。鈴木保彦（1988）は前期における墓域成立の意義に着目して、拠点論を補強した。また山本暉久（1985a・91）も、環状集落の踏襲的な住居占地や墓群を強固な血縁関係の反映とみる先見を示している。そ

の後・集落の形成過程が詳しく解析されるようになるにつれて、環状集落の見かけの大規模さや拠点的性格に対して批判的な疑問も提出されてきたが(土井1988等)、遺跡群の中に占める環状集落の機能や意味について考えようとするならば、やはり広場や墓群の存在意義を軽視するわけにはいかない。

遺跡群全体の中で環状集落が果たしていた機能について最も総合的な説明を呈示しているのは小林達雄(1980・86)である。環状集落(セトルメントパターンA)とそれ以外の集落(パターンB・C)との関係について、小林は次のように説明している。A・B・Cにはそれぞれ居住者としての単位集団があり、それぞれが周辺に生活領域をもつ。Aの一時点の戸数や居住人員はBと比べて突出して大きいとはいえず、「縄文サイズ」とも言うべき適正規模を大きく超えるものではないが、AとB・Cとの重要な違いは、むしろ領域内に分散する諸集団の統合の要となる公共の広場をAだけがもつ点にある。①広場、②遠隔地からの物資の保有量、③第二の道具、④集落の継続性などの特徴は、Aがもつ拠点としての機能を表す。「いざ事ある場合には、パターンB・Cのセトルメントに居住する各集団は、縄文モデル村の公共広場に集まるのであり、共同の行事あるいは儀礼・祭祀の場となるのである。こうして集団領域内に散在する各单位集団は、公共広場での共同行事を通じて、統合体としての紐帯を維持し、規律を確認する」(小林1986, pp.62-63)。つまり、さまざまな共同行事(たとえば誕生・成人・結婚・葬送などの人生通過儀礼)の際や、ある季節に、分散していた単位集団が集合する場としての機能が描写されているのである。環状集落にしばしば伴う超大型建物も、儀礼や集会用の施設あるいは訪問者の宿泊所であった可能性が指摘されている。小林説が多く<sup>10)</sup>の支持を集めているのは、環状集落の拠点的な機能を遺跡群全体との関係の中で合理的に説明しているからである。

こうした見方からすれば、環状集落の成立過程とは拠点形成の過程にほかならない。そしてここでの問題は、葬送の場となる集団墓の造営からそれが出発したのはなぜかという点に絞られる。この点をどのように説明できるであろうか。前期における拠点形成の動きの社会的背景を理解するには、集団墓の造営という行為が社会構造の維持にとっていかなる機能を果たしていたのか、その意味の説明が前提的

な問題となる。

## 2. 環状集落の成立過程と人口動態

前期に進行した環状集落の成立過程は、遺跡数の全体的な増加を背景にもつものであった。前期前葉～中葉は有楽町海進が最高潮に達した時期に該当しており、水産資源の豊富な内湾や汽水性の入江が発達した関東平野では、それまでになく高密度の遺跡群が出現した。特に黒浜式期における遺跡数の増加が顕著である(小杉・金山・張替・樋泉・小池1989、早坂1995、埼玉地区文化財担当者会1999等)。また、その経済効果は内陸部にも波及し、群馬県の赤城・榛名山麓や東京西部の多摩丘陵などで、局地的に濃密な遺跡群が出現した。集落数・住居数の増加に比例して人口密度はかつてない水準にまで高まったと考えられる。

環状集落の成立とこうした遺跡群の動向との関係を初めて具体的に論じたのは、和島と岡本である(和島・岡本1958)。和島・岡本は、環状集落の成立を海進期の環境変化とそれに適応する社会組織の変化として位置づけ、生産力の増大を図るために共同体がその規模を拡大させたものと理解した。横浜市の鶴見川入江一帯は前期の貝塚遺跡の密集地帯となっており、その中には二人が発掘した南堀貝塚をはじめ、西ノ谷貝塚・北川貝塚・茅ヶ崎貝塚など、前期中葉～後葉の環状集落が含まれている。和島・岡本は、31箇所の貝塚のうち28箇所が黒浜式～諸磯b式期に属することを明らかにして、密集する遺跡群の中に環状集落を成り立たせる要因を見出そうとした。

労働力を増強するために共同体が結束しその規模を拡大させたことが環状集落の形成につながった、と和島・岡本は理解したのであるが、筆者は拠点形成の意味について異なる理解をもっている。集団墓を中核とする拠点形成の動きは、大規模なムラを作ることよりも、むしろ自立化傾向を強める単位集団を結びつけ社会組織として統合することに意味があったと考える。高い人口密度は領域をめぐる利害対立の原因となる。各集落がそれぞれ生存に必要な一定のテリトリーを確保しつつ、全体的な社会秩序を維持するためには、個別的な居住集団を統合する大きな社会組織が必要である。集団墓の成立はそのような動きを反映したものではなかろうか。

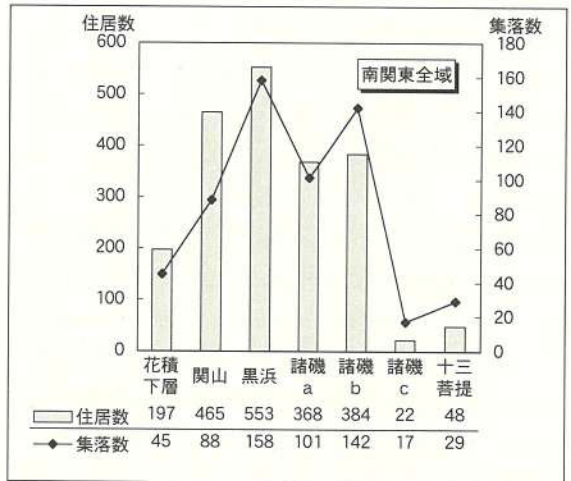
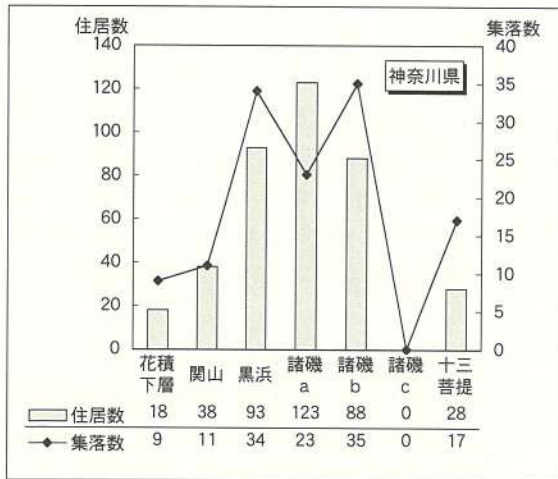
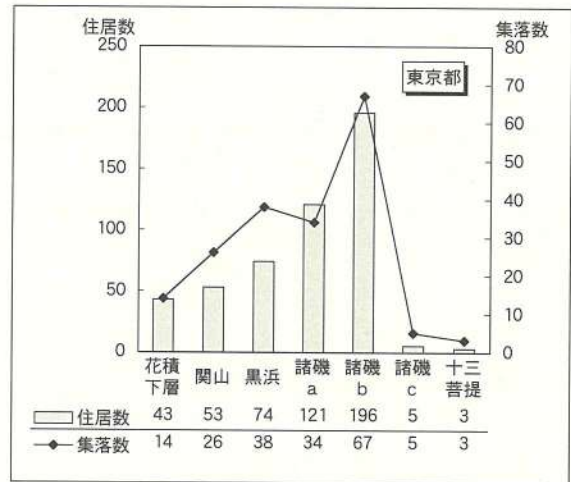
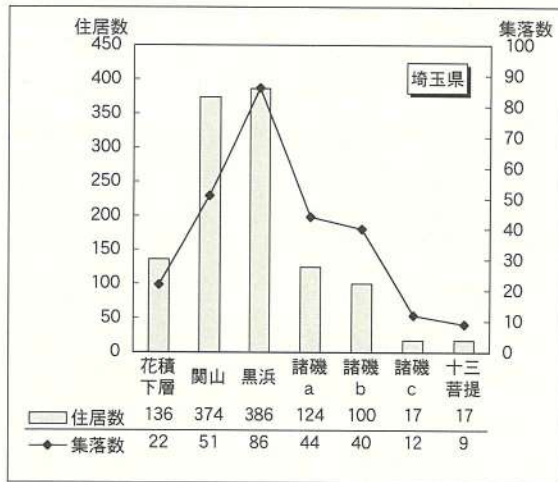
第3表／第7図 南関東における縄文前期の集落数と住居数の時期的推移

① 住居数

	花積下層	関山	黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	十三菩提
埼玉県	136	374	386	124	100	17	17
東京都	43	53	74	121	196	5	3
神奈川県	18	38	93	123	88	0	28
合計	197	465	553	368	384	22	48

② 集落数

	花積下層	関山	黒浜	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	十三菩提
埼玉県	22	51	86	44	40	12	9
東京都	14	26	38	34	67	5	3
神奈川県	9	11	34	23	35	0	17
合計	45	88	158	101	142	17	29



3. 人口密度の増大と単位集団の派生的増加

このような見通しがはたして妥当なものかどうか、実際に関東地方南西部の遺跡群を例に考えてみたい。環状集落の成立過程と人口動態との関係を統計的に検討するために、住居数と集落数の時期的推移を土器型式期別に調べた。基礎としたデータは埼玉県内の199遺跡1154棟、東京都内の167遺跡495棟、神奈川県内の115遺跡388棟、合計481遺跡2037棟の前期集落遺跡である。第3表および第7図のグラフに集計結果を示す。住居数・集落数から人口密度の

傾向を論じる際には、住居の面積、住居の耐久性、居住期間、建替えの頻度、移住の頻度、季節的な移動などについての検討を当然踏まえて置かなければならない。また、各土器型式の存続年数が極端に変わらないことを前提とした議論にも未証明の問題がある。そのためこの統計をそのまま人口動態に単純に置き換えることはもちろん適切でないが、大局的な傾向をまず読み取りたい。

早期末葉ないし前期初頭を境に増加しはじめる住居数は、前期前葉（関山式期）に著しく増加し、前

期中葉の黒浜式期にはさらに増加する。そして、この高い水準は、続く諸磯 a 式期から前期後葉諸磯 b 式期にかけて維持されていることが分かる。早期末葉～前期初頭に始まる環状集落の成立過程は、その背景にやはり住居数の顕著な増加を伴っていた。住居数の伸びが顕著に表れるのは前期前葉の関山式期であり、埼玉県内の古東京湾沿岸で特に目だった動向となっている。

墓群造営が顕著となる黒浜式期には、住居数も引き続き増加しているが、むしろ集落数が著しく伸びていることに注意したい。関山式期から黒浜式期にかけての推移を見ると、住居数の伸びは鈍化するが、集落数は著しく増加する。これは分散的な居住形態をとって小規模な集落が派生する傾向を表している。関山式期における住居数の増加は、埼玉県富士見市打越遺跡・さいたま市井沼方遺跡・所沢市海谷遺跡のような、少数の大規模集落の出現によるところが大きい。黒浜式期には環状集落増加の一方で小集落が新たに多数出現している事実がある。しかも黒浜式期における集落数の増加は、地理的環境の異なる埼玉県・東京都・神奈川県の内いずれにおいても共通した傾向となっている。

前期中葉における集団墓の造営は、高い人口密度が維持されるとともに、多数の小集落が派生する中で顕在化してきた動きであることが分かる。つまり、個々の世帯や少数世帯からなる単位集団が次第に自立性を強め、分散していく中で、一部の環状集落に集団墓の造営が本格化してくるのである。個別化と統合化との矛盾する動きが、集落数の動向からも再確認できる。

諸磯 a 式・b 式期になると、埼玉県側と東京都・神奈川県側とで異なる地域的動向が現れてくる。関山式期から黒浜式期にかけて、古東京湾沿岸は関東地方で最も遺跡密度の高い密集帯となっていたが、突出した動向は黒浜式期とともに終わり、埼玉県では黒浜式を過ぎると集落数と住居数が大幅に減少する。海進がピークを過ぎ急速な沖積が進んだことで貝塚群が減退したことがその要因である。それに対して、丘陵地帯を抱える東京都と神奈川県では、黒浜式期から諸磯 a 式・b 式期にかけて住居数・集落数の増加傾向が持続している。特に東京西部の丘陵地帯では、個々の住居の面積が小型化すると同時に、数棟以下の小規模集落が多数出現して分散化の傾向を強める (谷口 2003 b)。東京都・神奈川県では、

諸磯式期にむしろ環状集落や集団墓造営の動きが活発化するが、その背景にはやはり小規模な単位集団の自立化・個別化傾向が認められるのである。

環状集落の成立過程が、このような全体的な人口密度の増大と単位集団の派生的増加に関係していることは否定しがたい。長野県でも阿久遺跡や中越遺跡などの拠点形成の背景には、中越式期における住居数・集落数の増加があった (長崎・宮下 1984)。山梨県では諸磯 b 式期に住居数・集落数の著しい増加が起こると同時に、花鳥山遺跡や天神遺跡の拠点形成が見られる (櫛原 1999)。集団墓の造営を核にした拠点形成への動きは、高い人口密度の下での集団関係に何らかの要因を内在させていた可能性が強いのである。全体的な人口密度の増大は勿論だが、それよりも重要なのは居住単位となる世帯や単位集団の増加と分散化の動きであり、そこに拠点形成を促した最も根本的な要因が潜んでいたと見たい。

#### 4. 拠点形成の意味と出自集団の組織

環状集落の成立過程は、なぜ集団墓の造営を伴って進展したのか。一体何のための拠点形成であったのか。この問いに答える論理を欠いたまま表面的に集落変遷を辿るだけでは、前期という時代に社会的な評価は下せまい。

早期末葉ないし前期初頭になると、最初の環状集落が出現する。広場を囲む大規模な集落空間を特徴とし、戸数もそれ以前の段階に比べれば多く、地域的な拠点形成への原点となった。東京都国分寺市恋ヶ窪南遺跡や埼玉県白岡町タラ山遺跡などは大規模な拠点の様相を既に備えている。前期前葉には千葉県松戸市幸田貝塚、埼玉県富士見市打越遺跡、長野県宮田村中越遺跡のように、さらに多数の住居が集中する拠点集落が出現する。資源量や交通路などに関係する重要な立地が出現し、そこを拠点とする集団が成長してきたことを物語る。しかしながら前期前葉までの初期環状集落は、数が少ない上に継続性も弱い。換言すれば拠点形成の必要性はまだそれほど嵩じていないのである。

ところが、海進を背景に全体的な人口密度が増大してくると、状況は大きく変化した。特に関東地方の黒浜式期における住居数と集落数の増加ぶりはめざましく、多数の単位集団が自立化する動きがはっきりと現れてくる。問題はおそらく、それらが適度に分散できなくなることにあった。集落の立地は土

地や環境に制約されており、資源量や交通などの条件のよい場所により多くの集落が集まる。前期の生産技術は天然資源量の優劣を克服できるほどのレベルにはまだ達していなかったため、集落の多くは資源の偏在性に引きずられる形で、海進によって出現した内湾の沿岸地帯や関東西部の一部の山麓地帯に集中した。特に海進が最高潮を迎えた黒浜式期には、湾岸地帯にかつてない高い密度の遺跡群が出現した。拠点的な環状集落が成立してくるのは、いずれもこうした集落の密集地帯の中からであった。

横浜市鶴見川入江を例にみると、前期貝塚31遺跡のうち28遺跡が黒浜式・諸磯式期の所産であり（和島・岡本1958）、関山式以前の低調さとは対照的に、黒浜式期に遺跡群としての動向が活発化していることが分かる。また、集落数も黒浜式期に急増したことが港北ニュータウン地域内の調査などから判明している。この遺跡群の最初の拠点と目されるのが南堀貝塚（武井1990）と西ノ谷貝塚（坂本2003）である。いずれも黒浜式期から諸磯a式期に造営された地域最大の環状集落であり、しかも2つが指呼の間に隣接して相次いで造営されている点が注目される。前者にはA1タイプの集団墓が備わらしいが、後者には少数の土壙墓しかない。集団墓の機能は前者に置かれたのだろう。また、この場所から概ね1.5km以内の近距離には、さらに北川貝塚と茅ヶ崎貝塚が位置しており、拠点集落の造営が諸磯b式期まで続いた。拠点的な環状集落がほぼ同じ地区に密集する状況は、鶴見川入江をテリトリーとする集団の一つが、この場所を拠点として維持していたことを物語る。<sup>13)</sup>

前期中葉に現れた多数の環状集落が集団墓造営の動きを見せるのは、血縁関係を紐帯原理とする大きな社会集団（出自集団）が組織化されてきたことを意味する、と筆者は理解する。出自集団<sup>14)</sup>は祖先との系譜関係を通じて多くのメンバーを組織することができる。家族や集落という実際上の生活単位を超越して、さらに大きな社会組織を構成できることが、出自集団の一つの利点である。系譜関係の認知は人間関係を定義し、個人や家族の社会的な位置づけを明確にするものであるから、自立化する多数の単位集団を統合し得る機能にもなるのである。また系譜観念に基づく集団のアイデンティティーは、自他の区別をはっきりさせた。出自集団がもつこうした諸機能は、高い人口密度の中で社会秩序を維持する役

割を果たしたに違いない。集団墓はこのような大きな社会組織の成立を象徴するものであり、いわばその社会統合のための装置ともいえるものであった。

## 5. 出自集団の機能

血縁集団はそれ以前の段階からも何らかの形で存在したものと思われるが、群在化する集団墓の出現は、一層厳格な出自規則を伴って出自集団が制度化されたことを表わしている。前期前葉までの初期環状集落にはまだ系統的な連続性はほとんど認められなかったが、前期中葉に至って墓群造営の場が固定的となり、葬送行為が継続性を見せ始めるのは、系統的な持続性をもって出自集団が成長してきたことを物語る。分節構造の未発達さは、血縁による社会の分節化が中期ほどには進んでいなかった状況を示唆しているが（谷口2004）、出自集団を枠組みとする社会構造の出現によって個人や家族の社会的な位置づけが明確になり、高密度で大規模な社会の統制が可能になったことの意義はきわめて大きい。

出自集団を枠組みとする大きな社会組織の成立は、人口密度と領域の問題にその根を有する、というのが筆者の持論である（谷口1999・2002・04）。出自集団は、領域の全体的保有や相続などの財産管理という面でも有効に機能した。時間の経過とともに流動する家族や集落とは違って、出自集団は代替わりしても系統的な永続性をもち得るからである。たとえ世代とともにメンバーが入れ替わろうとも、法人的な組織は継続し、土地をはじめとする共有財産を保全する主体者となり得る。また、隣接する他集団に対しては対抗力や抑止力もそれだけ増すことになり、その意味でも領域の保全に大きく寄与し得る。海進期に急速に高まった人口密度の中で、自らのテリトリーを守る強固な組織としての役割を果たし得たからこそ、出自集団が社会の新たな枠組みとなり得たのであろう。

## V. 出自集団論と史観

### 1. 膨張する社会と新たな社会秩序

早期末葉ないし前期初頭に開始した環状集落の成立過程は、前期中葉に至り、集団墓の造営を伴って象徴的な完成を遂げた。祖先や系譜の観念をアイデンティティーの拠り所とする出自集団の出現によって、家族や集落という生活単位を超えた、さらに大

きな社会集団が組織化されることとなった。環状集落はこのような大きな社会組織が統合を維持するための拠点であった。居住形態は依然として分散的な傾向にあったが、多数の集落を包摂する地域社会が集団墓を中核として成立することになったのである。海進期に人口密度が高まる中で、領域権益を保守し、社会秩序を維持するための何らかの制度が必要になったからこそ、このような社会的変化が促進されたものと考えられる。

ここで論じてきた出自集団論は、和島誠一（1948）による母系氏族共同体論に追従するものではない。縄文社会の本質を「原始共同体」と規定する和島は、縄文社会が、環状集落に象徴される強い集団的規制の中から、次第に世帯間の格差や分業化によって発展の芽を生み出しながら、結局その枠を超えられなかったのは、採集経済の矛盾を克服できない生産力の限界によると考える。この生産関係の矛盾が大陸から伝来した水稲耕作によって打ち破られるまで、縄文社会の内部には大きな歴史的発展の力がなかったと理解されている（和島1962）。和島は縄文社会における家族の自立性を疑問視しており、劣弱な経済単位に過ぎないと見るからこそ、血縁で結束する氏族共同体を労働組織として重視したのである。筆者はこうした見方にまで賛成しているわけではない。それどころか反対であり、自立化・個別化の動きこそが統合の必要を生んだと考えた。

筆者が注視しているのは出自集団がもつ規制力である。人口が増え単位集団の数も増加して急速に膨張する社会を、明確な原理の基に編成し、持続的な関係と秩序を創出した点に、変化の歴史的意義を見出したいのである。墓域を中心とする「環」の空間構成から読み取るべきものは、単なる集会的な大きさではなく、一つの中心原理の下に個々の単位を求心的に統合しようとする意図なのである。出自集団は、多数の単位集団の個別的な動きを規制し、それらの分子を一つの社会体に纏め上げる装置として機能したものと理解すべきである。

## 2. 「縄文前期観の転換」をもう一度

ところで、単位集団（家族・世帯）の自立化とそれを統合しようとする規制強化の動きは、後期に顕在化すると考えられてきた。この問題に関連した論考は数多く、後期を縄文社会史の一つの画期と見る歴史観は既に固まった観さもある。

墓制史研究の画期的業績として広く読まれている林謙作（1980）と春成秀爾（1983）の論考は、こうした歴史観の原点になったものである。林は、北日本の後期中葉以降に、双分的原理に基づくそれまでの墓制に代わって、世帯の相対的な自立化を示唆する埋葬区が顕在化することを指摘し、縄文時代墓制の変遷を二段階に区分する最も重要な画期をそこに見出している。同じく墓制の発展段階を論じた春成も、村出身者と婚入者の区別を基本とする古いタイプの墓制から、世帯単位の主体性が増す新たな墓制への変化が、地域格差を見せながらも中期から後期にかけて進行したことを追認している。

長野県北村遺跡の分析を行った小杉康（1995）も、後期前葉に世帯別・出自別の墓制が顕在化することを論じ、中期から後期にかけて進行してきたこのような社会の分節化が、反動として血縁原理による統合化と再編成を生み、後期中葉の大規模配石遺構の成立につながったと解釈した。世帯の自立化が逆に統合装置としての大規模配石遺構を生む背景となったという見方は小杉独自のものであるが、後期における世帯の自立化が社会構造に大きな変化をもたらしたと見る歴史観の大枠は、林・春成説に通底するものである。北海道後期末における環状土籬の成立を考察した瀬川拓郎（1980）も、優れた論理で象徴的な墓域の成立の意味を説明した。遺跡数の増加と領域の固定化が社会的な動揺を生む中で、集団内の秩序を強化するとともに、敵対化する他集団に対し自集団の主体性を誇示する必要性が生じたと理解したのである。一方、山本暉久（1977）も、中期末の敷石住居に発達した屋内祭祀が解体し、後期に集落全体に関わる祭祀場が発達することについて、住居単位の個別化傾向が抑えられ共同体的紐帯が再編された過程とする見通しを早くから示していた。

世帯の自立化に力点を置くか、逆にその統合・再編を重視するかは、論者によって異なるが、それは後期社会の変質を表裏から見た違いに過ぎず、大きな見方は共通していることが分かる。

これらの論考は縄文社会史論の中で今なお新鮮な意義を有しており、それらが問いかける歴史観を一概に否定するものではない。しかし繰り返し強調してきたように、関東・中部地方では、環状集落が成立した前期に既にその歴史的過程が開始していたのである。鳥浜貝塚や阿久遺跡の発見によって「縄文前期観の転換」が公言されて久しいが、この言葉の

本当の意味は、社会史あるいは墓制史の分野でもう一度吟味し直す必要がある。それも大規模な集団墓だけでなく、墓制史研究の中でほとんど等閑視されてきた金堀沢タイプのような小墓群にも均しく目を向けた上でなければならない。

### 3. 「双子の矛盾」に適應した社会進化

著しい人口増加が起こった縄文前期の関東・甲信地方では、さまざまな面で社会的な矛盾が膨張していたようである。縄文社会の生態は基本的に小規模かつ分散的だと見る根強い意見がある（西田 1989, 羽生 1989・2000等）。狩猟採集民が適度に分散することによって享受する経済的メリットの説明は確かに首肯できる。しかし局地的にせよ人口密度が一定のレベルを超えてしまうと、各集落が互いに干渉、侵犯することなくそのような「快適なサイズ」に分散する居住形態が保てなくなる。資源の分布が均等で、なおかつ生産技術のレベルも高ければ分散は可能であろうが、実際前期には特定の地域への偏在化・集中化が起こった。古東京湾岸地帯などの過密な所では特に、領域をめぐる利害は複雑化し、対立する場面も生じたであろう。適度の分散と自由な土地利用を制限せざるを得ない状況が、高い人口密度の下では起こり得るのである。

一方、集落の内部ではもう一つの矛盾が生じつつあった。佐々木藤雄は、前期に大規模な集落が発達した前提条件として食料貯蔵の発達を重視しているが、そこに集中管理と個別管理という二つの管理形態を見出し、共同労働に基づく共同所有のほかに個別的労働による個別的占有が発生していた可能性を指摘している（佐々木1976・78・79・84・93）。全時期を通じて個別管理型貯蔵が未発達な西日本に対して、東日本では前期中葉には既に両者が出現しており、集落によって、あるいは同一集落内部の単位によっても、管理形態が均質でなくなる。佐々木はそこに原始的な平等社会を内側から突き崩す内的矛盾を見出していたのである。個別管理型貯蔵が、もし佐々木の説くように家族の個別化・自立化への動きに関係したものだとなれば、その運動は、統合どころか、むしろ単位数を増やす方向へ向かっていたと見なければならぬ。

統合的な動きと個別的・自立的な動きとの矛盾する方向性は墓制にも認められた。群集する集団墓の登場の半面で、小規模な単位集団が個別に営む世帯

墓があることは、既に詳論したとおりである。墓制に認められるこうした対極的な動きも、佐々木の指摘にそのまま重複するかのようである。ここにも矛盾をますます増幅させる根がある。

「双子の矛盾」とも言うべき前期のこうした社会状況を、縄文社会は「出自集団」という装置の創出によって解決しようとしたのではないか。平等の原則をなるべく維持しながら、膨張する高密度の社会を統制するためには、個人や家族の社会的位置づけを明確にし、権利と義務をはっきりさせる原理が大切である。出自集団の組織化は、自立化、個別化する単位集団を環節的な関係の中に位置づけ、領域の限らない細分化を防ぐとともに、一定のテリトリーを基礎とする地域社会の形成を促進した。また、隣接する他集団に対しては対抗力・調整力・抑止力を発揮し、地域社会の基礎となる領域の保全に決定的な役割を果たした。人口密度の高まりに適應し得る新たな社会秩序を模索する上で、出自集団の機能はきわめて有効に作用したと考えられるのである。

集団墓と環状集落の成立の背景をこのように理解すれば、環状集落の成立過程とは、前期の双子の社会的矛盾を乗り越えようとする歴史的な運動にほかならない。それはまた、より大きな社会体を取りまとめられる新機能の創出という意味において、一つの社会進化であった。

人口動態が引き起こす領域問題は、縄文社会が一定の状態に固定することを許さなかった。そこに縄文社会が内側から変化するエネルギーが宿り、常に歴史を動かす原動力になったと考えたい。

（國學院大學）

2003年11月23日 脱稿

### 謝辞

次の方々から資料・情報のご提供と有益なご意見をいただいたことに深く感謝する。石井 寛・奥野 麦生・金子直行・川崎 保・北村忠昭・日下和寿・櫛原功一・小松 学・坂上克弘・坂本 彰・杉本 充・高橋 誠・中西 充・細田 勝（五十音順、敬称略）

### 註

- 1) 「分節構造」と「重帯構造」は、環状集落の規則的な空間構成を現出する根本的な構造として筆者が重視するものであり、適切な術語が必要なことからこの二つの用語によって概念化した（谷口 1998・99）。環状集落は単に住居を環状に配置しただけの表面的なパターンではなく、



規則的な空間構成によって各種の施設や内部の単位を統一する構造に本質がある。分節構造とは環状集落において住居群や墓群を直径的に区分する構造を指し、全体を二分する構造や四分・八分などが知られる。重帯構造とは堅穴住居群・広場・墓群などの各種施設を一定の圏内に同心円状に配置する構造を指す。

- 2) 石揚遺跡の大型住居跡について報告書は前期初頭花積下層式期としているが、覆土出土土器が早期後葉の条痕文土器であることや、千葉県市原市諏訪台古墳群などで条痕文期の大規模住居が増加している状況などから、早期後葉の遺構と判断した高橋誠 (2003) の見解に従う。
- 3) 東京都埋蔵文化財センターが発掘調査、現在整理中。遺構数・時期・集落構成等の概要は、調査整理担当者の中西充氏のご教示による。ご高配に感謝する。
- 4) 福井県金津町桑野遺跡の石製装身具類を出土した24基の土壙墓群は土器の副葬を欠いており、その時期について概報等には明確な判断が示されていないが、玦状耳飾の型式編年に基づいて前期初頭に位置付ける木下哲夫 (2002) 等の推定に基づいておく。
- 5) 長野県塩尻市矢口遺跡も住居群に囲まれた中央空間に土坑群があり、群馬県赤城村三原田城遺跡の空間構成と酷似している。140基あまりの土坑の中にはやはり土壙墓が含まれるものと推定されるが、玦状耳飾等の石製装身具の出土例はなく、墓の存在を裏付ける明瞭な証拠は見出せない。小松学氏のご教示による。
- 6) 東北地方では最近、早期末葉～前期前葉の集落遺跡の発掘調査が相次いでいるが、多数の住居跡が残された遺跡でも、環状集落の空間構成が認められない例が目立つ。福島県相馬市猪倉B遺跡 (小暮1996) では、前期初頭～前期前葉を中心とする堅穴住居跡が250棟以上見つかったが、それらは丘陵頂部付近の平坦面に全体に群集して重複している。前期前葉の住居102棟が見つかった同市段ノ原B遺跡 (吉田1995) でも、住居群は段丘縁辺に沿って密集している。宮城県名取市今熊野遺跡 (小川・村田1986) では、大木1式～2a式期を中心とする堅穴住居71棟が発掘されたが、この場合も3箇所群集・重複するものの、やはり環状集落の構成は取らない。
- 7) 関東・甲信地方の前期集落に伴う墓の大部分は土壙墓である。土壙内に埋葬人骨が遺存することはきわめて稀であり、管見では神奈川県横浜市北川貝塚55号土壙 (坂本・鈴木1984) の例が知られるのみである。そのため土壙とそれ以外の土坑との峻別は容易でない。土壙墓認定の根拠となるのは、①玦状耳飾や玉類などの装身具、②副葬された完形土器・小型土器や石匙等の石器、③甕被葬を推定させる状況で出土する半損土器や大形破片、④抱石葬を推定させる状況で出土する礫・石皿等、⑤墓標の可能性のある上部構造などである。それが無い場合は坑の形態と集落内での分布状態、墓群の種類から推定せざるを得ない。前期の場合、直径0.8～1.5m前後の円形土坑や有段の円形土坑、長軸方向の一方がオーバーハン

グして他方が緩く傾斜する形態の楕円形土坑などが典型的な形態である。瀬川拓郎 (1980) の分析を参考にすると、いずれも屈葬に該当する形態・規模であり、伸展葬を想定させる長楕円形土壙は少ない。覆土の人為堆積・自然堆積が報告書に記載されることも多いが、決定的な根拠にはならないようである。残存脂肪酸分析などもまだ埋葬判定法として確立したものとはいえない。なお、千葉県松戸市幸田貝塚第I地点38号住居跡 (関山式期) での埋葬例などを考慮すると、一般的な土壙墓以外に、中期の所謂「廃屋葬」と同じく住居跡内への埋葬が存在したことも窺われるが、遺構として確認できるものは稀である。

- 8) 「廃棄帯」は、環状集落の構成要素の一つとして筆者が概念化したものである (谷口1998・2002)。現代的な意味での廃棄ではなく、各種遺物・土・貝殻等を一定の圏帯に継続的に集積していく行為自体に注目する。長期間にわたり累積的に形成される性質のものであり、単一の遺構という概念には当てはまらないが、環状集落の空間認識が踏襲される時間の経過とともに次第にその形態を鮮明にする特有の構造物である。こうした行為が長期間継続されると、大規模な馬蹄形貝塚や環状盛土遺構に成長していくのであり、中期以降に特殊化した側面を軽視すべきでないものの、これらも本質的には同じ構造物として理解できる。
- 9) 堀越正行 (2001) は前期の土壙墓群における副葬品の出現頻度を検討し、墓群によって副葬率が異なることを明らかにした。副葬が成人の一部に限定される場合、成人の半数近くに及ぶ場合、未成年者を含めさらに多数に及ぶ場合などの可能性を指摘する。堀越はこうした不均等を集団毎の副葬ルールの違いに求め、固定的な社会階層がないことの表れと解釈したが、むしろ墓群毎の性格の違いや被葬者たちの社会的位置づけの違いが示唆されているように思われる。堀越が分析したのは主にAタイプに該当する代表的な9遺跡の墓群であり、A1タイプの集団墓においても副葬の取り扱いは一様でないことが指摘されている。副葬品の認定には困難な問題が伴い、何を副葬品と見なすかによって分析の結果も左右される。本論では玦状耳飾などの装身具、および次の規準で選定した石器・土器を副葬品と見なした (第1表)。石器では石匙・石鏃・尖頭器等の小型定型器種と大型石核のみを副葬品とみなし、抱石の可能性のある石皿・磨石・礫等は除外した。土壙出土の土器にも甕被りと副葬との区別が必要だが、報告書からの判定には限界もあり、小破片は除き大形破片・半完形・完形土器の出土例を副葬と見なした。このような規準でAタイプとBタイプを比較すると、前者により多い傾向が把握できるが、堀越の指摘するとおりの墓群による変異も小さくない。
- 10) 小林達雄の環状集落拠点論は集落としての大きさではなく、あくまでも中心地としての機能に注目するものである。それに関連して次のような可能性が考慮されている

- 点にも注意しておきたい。「(環状集落が) 常住の地であったかどうかは大いに疑ってかからねばなるまい」(小林1980, p.16)。「Aの単位集団はB・Cのそれと同格ではなく、社会的に上位にあった可能性も考えねばならない」(小林1986, p.63)。
- 11) 鈴木保彦(1986)、縄文時代研究プロジェクトチーム(1995・97)、埼玉地区文化財担当者会(1999)による各県別の集計に加え、2002年までに増加した資料を増補して基礎データとした。
- 12) 関東南西部の場合、武蔵野台地・入間台地・相模野台地などの主要な台地では、中期にきわめて高い密度で集落遺跡群が展開するにも拘らず、前期には集落どころか遺跡自体の分布も稀薄である。前期と中期とでは集落の分布パターンが大きく異なっており、前期には古東京湾・古入間湾・古鶴見湾の湾岸地帯への偏在傾向が明らかである(谷口2003a)。
- 13) 酒誌伸男(1940)は南堀・西ノ谷・茅ヶ崎貝塚のような集中的な貝塚群に注目して、漠然とした想像と断りながらも、血縁関係で結びつく集団の存在を予測する卓見を示していた。
- 14) 出自とは個人を出生の時点で特定の親族グループへと編入する規則である。出自集団は父系・母系または双系の決められた系譜関係によって組織される。実際上の系譜関係に基づく父系または母系の単系出自集団をリネージと称する。しかし出自と実際の系譜関係は必ずしも同義ではなく、擬制的な血縁関係に基づく場合もある。クラン(シブ)・フラトリー・モイエティーなどがそれぞれであり、神話上の始祖またはトーテムから出たとする同族意識をもつ擬制的血縁集団として広く存在する。出自集団は個人の社会的位置づけに重要な役割を果たしており、成員としての権利・地位および他のメンバーに対して負う互恵的な義務を明確にすると同時に、外婚制によって婚姻を規制する機能をもつ。また、財産相続や地位継承にも関与する。以上は主にマードック(1978)による。
- 遺跡』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成14年度)』pp.17-20, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 宇佐美義春 1996「多摩ニュータウンNo424遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—先行調査報告4—』pp.57-128, 東京都埋蔵文化財センター  
 宇田敦司・松田富美子 1997「南羽鳥遺跡群Ⅱ」印旛郡市文化財センター  
 大賀 健 1998「川白田遺跡」川白田遺跡調査会  
 大野憲司・桜田 隆 1988「上ノ山Ⅱ遺跡」『東北縦断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ—上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』秋田県埋蔵文化財センター  
 岡本 勇・塚田 光 1962「栃木県藤岡貝塚の調査」考古学集刊1(4), pp.21-37  
 小川 出・村田晃一 1986『今熊野遺跡Ⅱ 縄文・弥生時代編』宮城県教育委員会  
 小倉 均・柳田博之 1998『井沼方遺跡(第13・14・15次)井沼方南遺跡』浦和市遺跡調査会  
 小野和之・谷藤保彦 1987「三原田城遺跡 八崎城址・八先塚 上青梨子古墳」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 小野正文 1986「塚越北A地区」『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会  
 川田 強・大平理恵 1998「七社神社前遺跡Ⅱ」北区教育委員会  
 木下哲夫 2002「福井県桑野遺跡の石製装身具—玦状耳飾の用途に関する出土状況からの検討—」『縄文時代の渡来文化』pp.144-163, 雄山閣  
 櫛原功一 1999「縄文時代の住居と集落」『山梨県史 資料編2』pp.473-509, 山梨県  
 栗城譲一・原川雄二 1999「多摩ニュータウン遺跡—No753遺跡—」東京都埋蔵文化財センター  
 黒坂禎二 2003「木津内貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 小池 孝・友野良一 1990『中越遺跡』宮田村教育委員会  
 小暮伸之 1996「相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ」福島県教育委員会・福島県文化センター・地域振興整備公団  
 小杉正人・金山喜昭・張替いづみ・樋泉岳二・小池裕子 1989「古東京湾周辺における縄文時代黒浜期の貝塚形成と古環境」考古学と自然科学21, pp.1-22  
 小杉 康 1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓祭制」の構造と機能—」駿台史学93, pp.101-149  
 小林達雄 1980「縄文時代の集落」国史学110・111, pp.1-17  
 小林達雄 1986「原始集落」『日本考古学4 集落と祭祀』pp.37-75, 岩波書店  
 小林深志 1993『阿久尻遺跡』茅野市教育委員会  
 小松 学 1994「矢口・唐沢南遺跡」塩尻市教育委員会  
 小宮恒雄 2002「茅ヶ崎貝塚」横浜市ふるさと歴史財団  
 埼玉地区文化財担当者会 1999「埼玉の縄文前期—埼玉地区縄文時代前期調査報告書—」埼玉地区文化財担当者会  
 齊藤 進 1984「多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度第7分

## 引用文献

- 青木幸一 1994「大綱山田台遺跡群Ⅰ—縄文時代篇—」山武郡市文化財センター  
 荒井幹夫・小出輝雄 1978「打越遺跡」富士見市教育委員会  
 荒井幹夫・小出輝雄 1983「打越遺跡」富士見市教育委員会  
 市川 修 1983「塚屋・北塚屋」埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001「大清水・大清水上遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成12年度)』pp.19-24, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002「大清水上遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成13年度)』pp.17-20, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003「大清水上

- 冊一] 東京都埋蔵文化財センター
- 坂上克弘 2000『大熊仲町遺跡』横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会
- 坂上克弘 2002『上台の山遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 酒詰伸男 1940『神奈川県下貝塚間交通問題試論—特に距離上より見たる土器形式と水上交通路について—』『人類学・先史学講座17』pp.1-65, 雄山閣
- 坂本 彰 1982『縄文集落の三つの型』利根川3, pp.1-12
- 坂本 彰 2003『西ノ谷貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
- 坂本 彰・鈴木重信 1984『横浜市北川貝塚の調査』『第8回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』pp.10-20
- 佐々木藤雄 1976・78・79『縄文社会論—ノート(上)(中)(下)』異貌5, pp.44-54, 同7, pp.2-19, 同8, pp.2-26
- 佐々木藤雄 1984『方形柱穴列と縄文時代の集落』異貌11, pp.113-139
- 佐々木藤雄 1993『和島集落論と考古学の新しい流れ—漂流する縄文時代集落論—』異貌13, pp.46-123
- 笹沢 浩・土屋 積 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—昭和51・52・53年度』長野県教育委員会
- 笹森健一 1987『土坑について』『備忘録—まとめにかえて—』『鷲森遺跡の調査』pp.266-285, 上福岡市教育委員会
- 佐藤憲幸・三好秀樹 2003『嘉倉貝塚』宮城県教育委員会
- 佐藤浩彦 2002『新田II遺跡』遠野市教育委員会
- 実川順一 1987『恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報I』国分寺市遺跡調査会
- 渋谷 貢 1991『千葉県芝山町大台遺跡群』山武郡市文化財センター
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 1995『神奈川における縄文時代文化の変遷III』『研究紀要1 かながわの考古学』pp.37-64, 神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 1997『神奈川における縄文時代文化の変遷IV』『研究紀要2 かながわの考古学』pp.17-44, 神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
- 鈴木良一 1989『羽白C遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書XIII』pp.7-246, 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 鈴木敏中 1983『三島市乾草峠遺跡』駿豆考古25, pp.9-13
- 鈴木保彦 1986『中部・南関東地域における縄文集落の変遷』考古学雑誌71(4), pp.30-53
- 鈴木保彦 1988『定形的集落の成立と墓域の確立』長野県考古学会誌57, pp.4-16
- 鈴木保彦 1991『関東・中部地方における縄文時代の集落』よねしろ考古7, pp.1-22
- 清藤一順 1978『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI』千葉県文化財センター
- 清藤一順 2000『飯山満東遺跡』『千葉県の歴史 資料編考古1』pp.426-431, 千葉県
- 瀬川拓郎 1980『環状土籬』の成立と解体』考古学研究27(3), pp.55-73
- 関根慎二 1987『糸井宮前遺跡II』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 千田茂雄・関根慎二 2001『野村遺跡(前期)』『安中市史第4巻 原始・古代・中世資料編』pp.78-84, 安中市
- 大工原 豊 1996『中野谷松原遺跡—縄文時代遺構編—』安中市教育委員会
- 大工原 豊 1998『縄文時代の集落の景観復元』『中野谷松原遺跡—縄文時代遺物本文編—』pp.549-578, 安中市教育委員会
- 大工原 豊・関根慎二 1994『縄文時代前期前葉の集落について』『中野谷地区遺跡群』pp.236-253, 安中市教育委員会
- 高橋 誠 2003『房総の縄文早期大型住居』『城山ノ作遺跡』pp.37-53, 印旛郡市文化財センター
- 高橋 誠・中山俊之・林田利之 1994『木戸先遺跡』印旛郡市文化財センター
- 武井則道 1990『南堀貝塚』『全遺跡調査概要』pp.16-18, 横浜市埋蔵文化財センター
- 谷口康浩 1986『縄文時代「集石遺構」に関する試論—関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として—』東京考古4, pp.17-85
- 谷口康浩 1998『環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—』古代文化50(4), pp.1-18
- 谷口康浩 1999『環状集落から探る縄文社会の構造と進化』『縄文学の世界』pp.20-35, 朝日新聞社
- 谷口康浩 2002『環状集落と部族社会—前・中期の列島中央部—』『縄文社会論(上)』pp.19-65, 同成社
- 谷口康浩 2003a『縄文時代中期における拠点集落の分布と領域モデル』考古学研究49(4), pp.39-58
- 谷口康浩 2003b『諸磯式期におけるセトルメント・パターンの振幅—和田西遺跡の大型堅穴建物群をめぐって—』『和田西遺跡の研究』pp.3-22, 考古学を楽しむ会
- 谷口康浩 2004『環状集落の比較生態論』『考古学研究会50周年記念論文集 文化の多様性と比較考古学』(印刷中) 考古学研究会
- 土井義夫 1988『「セトルメント・パターン」の再検討』史館20, pp.76-85
- 戸田哲也・新井和之・館 弘子 2002『雪ヶ谷貝塚』玉川文化財研究所
- 利根川章彦 1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富澤敏弘 1985『中棚遺跡・長井坂城跡』昭和村教育委員会
- 富元久美子 2003『飯能の遺跡(31)』飯能市教育委員会
- 友野良一 1978『カゴ田』飯島町教育委員会
- 長崎元廣・宮下健司 1984『長野県における縄文時代集落遺跡資料集成図集』『縄文時代集落の変遷』日本考古学協会・山梨大会実行委員会
- 中島 宏 1977『金堀沢遺跡』入間市金堀沢遺跡調査会

- 中島 宏 1980『伊勢塚・東光寺裏遺跡』埼玉県教育委員会  
中西 充 1983『宇津木台遺跡群Ⅱ』八王子市宇津木台地区  
遺跡調査会  
中村敬治・江幡良夫 1998「南小割遺跡」『茨城中央工業団  
地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団  
新津 健・米田明訓 1994『天神遺跡』山梨県教育委員会  
西井幸雄・鈴木敏昭 1984『茶屋遺跡』白岡町教育委員会  
西田正規 1989「縄文時代の社会水準」『縄文の生態史観』  
pp.41-65, 東京大学出版会  
西山太郎 2001「縄文時代前期の土壌群—特に千葉県域を中  
心として—」印旛郡市文化財センター研究紀要2, pp.53-  
71  
羽鳥政彦・松田光太郎 1994「愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕  
遺跡・日向遺跡」富士見村教育委員会  
羽生淳子 1989「住居址数からみた遺跡の規模—縄文時代前  
期諸儀式期の資料を用いて—」『考古学の世界』pp.71-92,  
新人物往来社  
羽生淳子 2000「縄文人の定住度（上）（下）」古代文化52  
（2）, pp.29-37, 同52（4）, pp.18-29  
早坂廣人 1995「水子貝塚」富士見市教育委員会  
林 謙作 1980「東日本縄文前期葬制の変遷（予察）」人類学雜  
誌88（3）, pp.269-284  
林田利之 2000「木戸先遺跡」『千葉県の歴史 資料編考古  
1』pp.480-485, 千葉県  
春成秀爾 1983「縄文葬制の諸段階」歴史公論9（9）, pp.40-  
51  
樋口昇一 1976「十二ノ后遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その5—昭和50年度』長  
野県教育委員会  
福嶋宗人 1997「武蔵国分寺跡遺跡北方地区」東京都埋蔵文  
化財センター年報17, pp.31-35  
古内 茂・清藤一順 1976『飯山満東遺跡』千葉県都市公社  
古里節夫 2000「幸田貝塚」『千葉県の歴史 資料編考古1』  
pp.404-409, 千葉県  
堀越正行 1986「京葉における縄文中期埋葬の検討」史館19,  
pp.1-66  
堀越正行 2001「縄文時代前期土壌群の数的研究」史館31,  
pp.1-15  
マードック, G.P. 内藤莞爾監訳 1978『社会構造』新泉社  
向山遺跡発掘調査団編 1986『向山遺跡』東久留米市教育委  
員会  
安井健一 1994『沼南町石揚遺跡』千葉県文化財センター  
梁木 誠 1988『聖山公園遺跡V—根古谷台遺跡発掘調査概  
要—』宇都宮市教育委員会  
山本静男 1982『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地  
内埋蔵文化財調査報告書—兵崎遺跡・大谷津A遺跡・対  
馬塚遺跡・大谷津B遺跡・大谷津C遺跡・外山遺跡—』  
茨城県教育財団  
山本暉久 1977「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋蔵に  
ついて」信濃29（11）, pp.33-56, 同29（12）, pp.48-64  
山本暉久 1985a「集団・共同体」『考古学調査研究ハンド  
ブックス3』pp.37-47, 雄山閣  
山本暉久 1985b「縄文時代の廃屋葬」古代80, pp.39-71  
山本暉久 1991「環状集落址と墓域」『古代探叢Ⅲ』pp.137-  
178, 早稲田大学出版部  
横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編 1986『古代の  
よこはま』横浜市教育委員会  
吉田秀享 1995『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県教育  
委員会・福島県文化センター・地域振興整備公団  
和島誠一 1948「原始聚落の構成」『日本歴史学講座1』  
（『日本考古学論集2』所収, pp.2-27, 吉川弘文館, 1986）  
和島誠一 1962「序説—農耕・牧畜発生以前の原始共同体—」  
『古代史講座2』pp.2-16, 学生社  
和島誠一・岡本 勇 1958「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史  
1』pp.29-46, 横浜市
- 図版出典**  
第1図 福嶋1997第2図改変／埼玉地区文化財担当者会1999  
第33図改変／安井1994第130図改変／『富士見市史 資  
料編2 考古』付図改変／岡本・塚田1962第2図改変／  
千田・関根2001図52改変／小林1993第4図転載  
第2図 木下2002図3改変／小野・谷藤1987付図1改変・第  
127図転載  
第3図 梁木1988第7図改変／宇田・松田1997第204図改  
変／林田2000図3改変／小宮2002第3図改変／横浜市港  
北ニュータウン埋蔵文化財調査団編1986, 武井1990原図  
より作成／清藤2000図2, 古内・清藤1976別図2より作  
成  
第4図 大工原1998第251図改変／清藤1978第46図改変・第  
70図転載／関根1987第1図改変／羽鳥・松田1994第4図  
改変／山本1982第76図より作成  
第5図 栗城・原川1999第5図・第8図・第14図・第76図よ  
り作成／西井・鈴木1984第4図・第7図改変／中島1980第  
3図・第39図転載／利根川1991付図1改変／中島1977第  
10図改変／宇佐美1996第6図改変／黒坂2003第16図改  
変／利根川1991第120図・第124図改変  
第6図 笹沢・土屋1982挿図204・付図3転載  
第7図 初出原図